

厚生労働省 平成22年度老人保健事業推進費等補助金

老人保健健康増進等事業

介護サービス施設等の  
地域との連携のあり方に関する  
調査研究事業

報告書

特定非営利活動法人 Uビジョン研究所

平成23年3月

## はじめに

特別養護老人ホームの社会的な役割と存在意義は、措置制度から介護保険制度に変わったことに伴い大きく変化した。その変化は、利用する住民の意識が変化したことによるものである。

特別養護老人ホームは利用者が施設を選択できるということと契約によるサービスの保障が住民の意識を変える大きな契機となった。さらに、施設の情報開示や公開を義務付けることによって、サービスの内容が分かりやすくなり、利用しやすい条件が整ってきた。施設定員は現在、約 43 万人であり、待機者数も約 42 万人と年々増加してきている。

利用者が施設を選択できるという権利を保障しながら、需要と供給のバランスが取れておらず、選択できる条件にはない。施設サービスの内容に不満や納得できないことがあっても施設を変えることは困難で、さらに、サービスの質の担保について、住民が信頼できるだけのシステム構築にはいまだ至っていない。

介護保険制度は「高齢者の人として尊厳」を方針に掲げており、その人の尊厳を支えるケアとは、その人の思いを大切にし、人間らしい姿で身体も精神も気持ちよく安心できる日常生活を保障することだと考える。それを実現していくために、施設において不足しているのは職員の絶対数である。

求められているサービスに対応できる職員の配置数ではなく、身体介護だけでもギリギリの状態である。

職員数を増やすことも必要であるが、また、それだけで、人間の尊厳が保たれ、サービスの質が向上するかというとそうとも言えない。その人が地域の一員として、また、社会の一員として人生最期まで自分らしく生き抜いていくことができる支援の考え方が不可欠ではないかと思われる。

Uビジョン研究所では、身体的に重度で精神的にも支援が必要な高齢者が、施設で暮らしていても地域の中で生きている実感と生きている喜び、楽しさ、孤独を共有し、共感できる人たちの触れ合いや出会いを大切にできる支援の仕組みとして、単独世帯や高齢者世帯の住民と協働できる体制を構築できないかと、4年間模索してきた。地域を支え、地域に支えられる共生、協働の關係に積極的に取り組む姿勢のある施設に協力していただいたことと、さまざまな分野で活躍する委員の方々の協力によって、その方法と体制について提案することができた。

この調査研究が今後の特養ホームを利用する人たちの暮らしの質を高めることに役立つことを心より願っている。今回、平成 22 年度老人保健健康増進等事業に申請し、助成金を受けることができたことに感謝申し上げたい。

特定非営利活動法人 Uビジョン研究所  
理事長 本間 郁子

## 目 次

はじめに	1
1. 事業の背景	3
2. 事業目的	4
3. 事業内容	4
(1) 委員名簿	5
(2) 事業実施状況	6
①委員会	6
②ヒアリング調査	7
③アンケート調査	24
4. 提言	51
資料編	56

# 1. 事業の背景

介護保険制度の導入後、特別養護老人ホーム等、介護サービス施設の役割が変化してきている。

特別養護老人ホームであれば、社会福祉法人としての地域に果たす役割が継続されつつ、新たに経営責任が求められるようになった。経済的条件にかかわらず、家族状況にかかわらず、日常生活において介護が必要なすべての国民にサービスを提供しなければならないという社会的使命を果たしつつ、限られた介護報酬の中でより良いサービスの質を確保しなければならないという命題が課せられた。

また、2025年には、団塊の世代が75歳に到達し、認知症をもつ人は320万人に増加すると推計されている。介護保険制度だけでは支えきれぬ数ではなく、高齢者が高齢者を支える仕組み作りと病気を持っていても豊かな人生が生きられる地域社会の構築に向けた意識改革が必要である。

世帯分類では、単身世帯が全国でも一番多くなることが予想されている。高齢期における家族が担える精神的な支えと、子育て期の若い世帯が「老い」を生活体験のなかで知る機会が無くなっていることは、自分のライフコースが見えにくくなることにつながり、重要な社会責任が果たせないことが考えられる。

家族の役割を家族単位で考えるのではなく、地域の社会資源を活用して、子育てから老いに至るまでのライフコースを同じ生活体験のなかで歩めるようにし、老いるということが自分の人生のなかに位置づけられ、理解されるよう地域サポートシステムを構築することが必要である。

内閣府が平成20年度に行った国民生活選好度調査で「自分の老後に明るい見通しを持っている」かについて尋ねたところ、「自分の老後に明るい見通しを持っている」（「全くそうである」＋「どちらかといえばそうである」）と回答した人の割合は11.8%となっており、平成17年の14.4%から2.6%ポイントの低下と依然減少傾向にある。老後に明るい見通しが持てるような介護サービス施設のあり方を示していかなければならない。

人生最期を「どこで」「誰に」「看取られる」かは、「尊厳ある生き方」を支援する重要な選択である。介護サービス施設で最後まで生き抜くということを多くの世代に理解してもらえるようにすることは大切な社会の役割である。

一方、内閣府が平成20年度に全国の60歳以上の男女5000人を対象に行った「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」では、「今後地域活動に参加したい」と考える人は54.1%と過去の調査と比較すると増加傾向にあり、初めて50%を超えた。

国の限られた財源で、期待されるサービスの質を確保していくためには、地域と施設の有する人的資源を共有し、お互いの課題に共に取り組むことで新たな展開が期待されている。地域を支える介護サービス施設の新たな役割を明確化し、地域の持つ人的・物理的資源を有機的に機能させたシステムの構築が考えられる。

## 2. 事業目的

地域の一人暮らし高齢者が朝夕などマンパワーが必要な時間帯にボランティアとして特養ホームで活動し、ホームは栄養バランスのとれた食事を一人暮らし高齢者に提供することなどにより、特養ホームがよりよい介護サービスを実現しつつ、地域福祉において新たな役割を担っていく可能性を検討する。

## 3. 事業内容

上記の目的を達成するために、「介護サービス施設等の地域との連携のあり方に関する調査研究委員会」を設置し、下記の事業を実施した。

①地域における特養ホームの位置づけと機能整理

②調査対象地域における意向調査の実施

(行政、介護予防担当機関、地域包括支援センターへのヒアリング、一般住民、介護サービス施設職員へのアンケート調査)

③特養ホームと地域との連携のあり方に関する課題抽出や仕組みにかかる提言の検討

今回は調査対象地域として京都市伏見区北醍醐地域を選定し、京都市、伏見区醍醐支所、京都市深草・醍醐地域介護予防推進センター、京都市醍醐・北部地域包括支援センター、社会福祉法人同和園に協力を得て調査を行った。

今回の調査は対象地域が一地域ということで、調査内容及びその結果は、決して統計的に有意な普遍的な事項であるとは言い難いが、現時点における介護サービス施設と地域連携のあり方について、課題抽出やある一定の方向性を示唆するモデルとしての意義は認められるのではないかと考えられる。

(1)介護サービス施設等の地域との連携のあり方に関する  
調査研究委員会 委員名簿

	氏名	役職
委員長	本間 郁子	特定非営利活動法人 Uビジョン研究所 理事長
委員	菊池 馨実	早稲田大学法学学術院教授
委員	松本 均	横浜市健康福祉局介護保険課長
委員	松本 由美子	元九州保健福祉大学助教授 特定非営利活動法人 Uビジョン研究所 理事
委員 (第3回 委員会)	滝野 文恵	特定非営利活動法人Uビジョン研究所 副理事長 特定非営利活動法人特養ホームを良くする市民の会理事
委員 (第3回 委員会)	於保 郁子	特定非営利活動法人特養ホームを良くする市民の会理事
委員	鈴木 夕佳	特定非営利活動法人 Uビジョン研究所 事務局長・研究員

## (2)事業実施状況

### ①介護サービス施設等の地域との連携のあり方に関する調査研究委員会

#### 1) 目的

介護サービス施設等の地域との連携の現状を調査し、そのあり方を検討するために各分野の7人の委員からなる委員会を設置し、多方面から議論を行った。

#### 2) 内容

##### 第1回 委員会

日時：平成22年10月25日

会場：特定非営利活動法人Uビジョン研究所 会議室

##### 議題

- 1 事業計画について
- 2 地域における特養ホームの位置づけと機能整理について
- 3 ヒアリング及びアンケート内容の検討
- 4 次回日程・その他について

##### 第2回 委員会

日時：平成23年1月24日

会場：特定非営利活動法人Uビジョン研究所 会議室

##### 議題

- 1 これまでの進捗状況のご報告
  - ・特別養護老人ホームヒアリング調査
  - ・地域包括支援センターヒアリング調査
  - ・介護サービス施設職員アンケート調査
- 2 今後の進め方について
  - ・ヒアリング調査の内容とまとめ方
  - ・介護サービス施設職員アンケートのまとめ方
  - ・住民アンケートの内容とまとめ方について
- 3 次回日程・その他

### 第3回 委員会

日時：平成23年3月23日

会場：特定非営利活動法人Uビジョン研究所 会議室

#### 議題

- 1 これまでの進捗状況のご報告
  - ・ヒアリング調査
  - ・住民アンケート調査
- 2 特養ホームと地域との連携のあり方に関する課題抽出やしくみの提言の検討

## ②ヒアリング調査

### 1)実施状況一覧

日時	調査対象者
平成22年11月10日 14時～16時	京都市醍醐・北部地域包括支援センター 所長
平成22年11月11日 10時～12時	特別養護老人ホーム同和園 ケアサービス統括部長 主任相談員
平成23年1月26日 14時～15時30分	京都市深草・醍醐地域介護予防推進センター 所長 コーディネーター スーパーバイザー
平成23年1月26日 16時～17時30分	京都市保健福祉局長寿社会部 長寿福祉課 長寿施策担当課長 介護予防推進係長 長寿福祉係長 介護保険課 管理係長
平成23年1月27日 10時～11時30分	京都市伏見区役所 醍醐支所 福祉部 支援課 課長 支援第二係長 介護課 課長補佐 係員
平成23年2月24日 14時30分～17時	特別養護老人ホーム同和園 主任ケアワーカー2名 副主任相談員 ショートステイ主任
平成23年2月25日 13時～14時	特別養護老人ホーム ユニットリーダー2名



## 2)ヒアリング調査内容

### I 京都市醍醐・北部地域包括支援センター

ヒアリング対象者：所長

◆一般・特定高齢者施策への地域包括支援センターの取り組みの現状について。

京都市では地域介護予防推進センターという独自の機関があり、そこで特定高齢者施策の教室事業を行っている。そのため、地域包括支援センターとしては、スクリーニングで上がってきた特定高齢者を地域介護予防推進センターに紹介し、プランを作って介護予防推進センターの教室に行ってもらっている。

その他、学区ごとに行っている「健康すこやか学級」に出張して、啓蒙的な活動を行ったり、学区ごとの社会福祉協議会で健康教室を行っているので、そこにうかがってお話しするなどの関わりがある。

ただし、個人情報保護の兼ね合いなどもあり、センターが把握できている高齢者は担当区域内の7～8割にとどまり、住民票が他の地域にあるまま居住しているような方はなかなか把握できていないのが現状である。

◆介護予防に対する地域住民の意識について

地域の高齢者の介護予防への関心は高く、特に健康維持への取り組みに関心を持っていると実感している。

◆要支援の方がボランティアできる可能性について

要支援2の方は要介護1に近いので、ボランティアを行うのは難しいと思われるが、要支援1の方の一部がボランティアを行うことは可能なのではないかと。具体的には要介護高齢者の見守りや、花の水やりなどができるとし、本人のリハビリにもつながると思う。

実際、要支援認定を受けた人で傾聴ボランティアをやりたいという人もいたが、受入れ体制を整えないと不安である。

◆要支援の方の栄養状態について

要支援の方の中には、面倒で1日2食しか食べない人がいる。また、食事の偏りのある方もいる。

◆地域の他法人の特別養護老人ホームとの関係について

現在では直接の接点はあまりなく、地域に施設が出ていく手段として包括を利用して

もらえればよいと思うが、そうはなっていない。特別養護老人ホームで何をやっているか、地域の人からは見えていないのが実情ではないか。

◆地域包括支援センターの地域のネットワークづくりの取り組みについて

要支援の方のケアマネジメントに手いっぱいの中、地域包括支援センターが地域のネットワークづくりを十分行えていないのが現状だと感じる。

個人情報保護法もネックになっており、地域の民生委員同士の会話さえ、イニシャルで行うようになっている。民生委員が地域から情報を得て、一人暮らしの人をたずねていくと「なぜうちが一人暮らしということを知っているのか」と聞かれることさえあり、ネットワーク作りの難しさを感じる。

《考 察》

包括的支援事業を一体的に行い保健医療の向上・福祉の増進を包括的に支援することを目的として設立された地域包括支援センターだが、現状は要支援の方と特定高齢者のケアマネジメントに忙しく、また、プライバシー意識の高まりもあって地域包括ケアシステム確立への取り組みを行うこともハードルが高くなっていると考えられる。

## Ⅱ 特別養護老人ホーム同和園

調査対象者：ケアサービス統括部長 主任相談員

### ◆同和園におけるボランティアの現状について

ボランティアグループの関わりとしては3グループあり、月1回窓ふきに来てくださる会、年2回の清掃に来てくださる会、月1回程度折り紙や料理等のグループワークに来てくださる会がある。ただ、定員が288人の特別養護老人ホームなので、それぞれのユニットには年に1回ぐらいの関わりとなってしまう。

個人のタオルたたみや傾聴ボランティアなどの関わりもあるものの、園として組織的にボランティアを受け入れる態勢は整っておらず、こうしたボランティアの方々も、同和園のコーディネートで続いているものではなく、グループや個人の方からの申し出で行っているものとなっている。受け入れ窓口も相談員が行っていて専任の担当者がいない。

また、同和園には養護老人ホームが併設されており、入居者の中には特別養護老人ホームに皿洗いのボランティアをしに行ったり、デイサービスやショートステイで歌を歌うボランティアをされている方もいる。また、特別養護老人ホームの豆ごはんのための豆むきやいも煮会の準備などを手伝っていることもある。以前は特別養護老人ホームの清掃や敷地内にある茶畑の茶摘みを養護老人ホームの方がされていたこともあった。

地域でボランティア講座を行ったこともあるが、実際にボランティアまでにはつなげられなかった。

### ◆同和園と地域との連携について

これまでの地域との連携としては敬老会を行ったりしていたが、平成22年度には法人の重点目標として「地域包括的新事業の立ち上げ」ということが掲げられており、実際に地域の人が利用できるコミュニティカフェを敷地内にオープンしたり、地域にデイサービスをオープンさせる準備を行っている。

これまではどちらかというと施設内のケアの改革に注力してきたが、同和園はどれだけ地域ニーズを把握できているのか、また、同和園の社会資源をどれだけ地域に還元できているのか疑問を感じるようになった。そこで、同じく平成22年に地域包括ケア委員会を立ち上げ、地域とのかかわりについて検討し始めた。

地域包括ケア委員会では、今年度は施設見学会や「地域ケアセミナー」を始めた。「地域ケアセミナー」は4回シリーズで、①介護保険②排泄③入浴④食事をテーマに、地域住民を対象に講座を行うものである。認知症のセミナーも行い、30人ほどの参加者があった。

また、ホームシェアリングについても現在1居室行っており、今後も進めていきたいと感じている。

◆地域とよりよい連携を行っていくために必要なことについて

自分から地域に出ていくことが難しい特別養護老人ホームの入居者にとって、ボランティアは生活の幅を広げ、人間関係を深めるために不可欠なものであるということを、職員、少なくともリーダークラスは認識できなければならないと思う。

そのためには現在のように受け入れを相談員が相談業務の片手間で行うのではなく、専任の担当者を置いてコーディネートしていくことが重要だと思う。

《考 察》

特別養護老人ホーム同和園は、介護サービス施設にとって地域との連携は不可欠であることを認識し、コミュニティカフェのような様々な方策を打ち出している。

入居者の重度化が進行している状況を鑑みても、地域の方が施設を訪れてくれる仕掛けを考えることは今後の特別養護老人ホームにとって非常に重要なことであると認識されているが、ボランティア講座を行ってうまくいかなかった経験もある。専任のコーディネーターが必要という認識はあるが、それ以外の体制についてどのように整えていったらよいか戸惑いが感じられた。

今後は、幹部職員などが、地域連携やボランティアに関する介護サービス施設での先進事例を学び、リーダーシップを発揮して、ボランティアが施設に不可欠であるという認識を全職員が共有できる教育体制を構築しつつ、専任のコーディネーターを置いて体制作りを図っていく必要があると考えられる。

### Ⅲ 京都市深草・醍醐地域介護予防推進センター

調査対象者：所長 コーディネーター スーパーバイザー

#### ◆地域介護予防推進センターの概要は

介護予防の推進のため、京都市が独自に設置したセンターで市内 12 か所にある。当センターは人口 12 万～13 万人のエリアを担当しており、現在、運動器の機能向上（以下、筋力アップ教室）、栄養改善、口腔機能向上、認知症予防等の介護予防教室の事業を中心として活動している。

#### ◆筋力アップ教室について

筋力アップ教室は、週 1 回、全 12 回（3 ヶ月間）を 1 クールとして行っており、対象者は各地域包括支援センターより申し込みのあった特定高齢者及び、筋力低下の恐れがある一般高齢者である。今までには、90 代の方の参加もあった。教室は定員（15 名前後）に達することが多く、中には定員の 2 倍以上の応募がある教室もあり、抽選やクラスを増設することもある。

#### ◆筋力アップ教室終了後のフォローアップについて

教室が終了すると運動をしなくなってしまうということでは、介護予防の効果が薄くなってしまいますので、当センターでは教室終了後も、運動習慣継続のため月 1 回、6 カ月間のフォローアップ教室を行ったり、参加メンバーで自主サークルを立ち上げ、運動を楽しく継続していけるよう支援している。

現在自主グループが 4 つ立ち上がっており、その活動は、月 1～2 回程度である。今後、自主グループを増やしていきたいが、地域に無料または安価で借りられる活動場所があまりなく、そこがネックになりそうである。

また、団地やマンション等の高齢化が進んでいるため、各集会所で教室を開催し、その後自主サークルにつなげていくことも必要と感じている。

#### ◆参加者の男女比について

教室の参加者は女性が多く、男性は各クラスに 1、2 人しかいない。3 月に男性だけの体操教室を行うが、男性は教室型の事業より、その方の得意なことを引き出して介護予防につなげていくようなものの方が求められているようにも感じる。

#### ◆ボランティアを通じた介護予防について

京都市では「高齢者筋力トレーニング普及推進ボランティア養成講座事業」があり、中高年を筋力トレーニングの普及推進を行うボランティアとして養成しているが、その

方たちの活動の場が不足しているという実情がある。

講座を修了しても、初めは介護予防推進センターのサポートが必要と思われるが、毎日のように教室事業を行っている中で、十分なサポートができていないというのが現状であり、課題でもある。今後センター独自のボランティア養成講座の実施を検討している。

◆地域の介護施設等との連携について

地域の特別養護老人ホームなどの介護施設との連携は現状ではあまりないが、ケアハウス内の食堂を借りて教室を開催したり、今後は、介護施設と地域包括支援センターとの連携を深め、より地域に密着した介護予防事業を展開していきたい。

《 考 察 》

京都市独自の機関である介護予防支援センターは、現在、介護予防の教室事業を非常に積極的に展開している。今後は教室以外の地域ニーズに即した介護予防事業の展開にも目を向けており、ボランティア養成講座等も行っていこうとしている。

今後、地域は地域包括支援センターとともに、地域包括ケアシステムを確立していくことが期待される。

## Ⅳ 京都市保健福祉局長寿社会部 長寿福祉課・介護保険課

調査対象者：長寿福祉課／長寿施策担当課長 介護予防推進係長（課長補佐）

長寿福祉係長

介護保険課／管理係長

### ◆京都市で地域介護予防推進センターを独自に開設していることについて

地域介護予防推進センターという方式には、介護予防のメニューごとにサービス提供するのではなく、すべてのメニューを1か所で提供できるというメリットがある。

### ◆介護支援ボランティア制度について

介護支援ボランティア制度については、施設の中で行っていく分にはよいが、京都市のような大きな都市の中でのポイント制度は管理が難しいのではないかと。

ポイント制よりも、ボランティアをした人に食事を提供するというほうがなじみやすいと思う。

ただ、ボランティアセンターでの案件を見ていると、ボランティアと言っても有償ボランティアが非常に多くなっている中で、どれだけの人が食事をメリットに感じるかはわからないと思う。

### ◆介護予防を兼ねたボランティアについて

介護予防を兼ねて高齢者に介護施設でボランティアしてもらうことは、一石二鳥だとは思いますが、現在介護予防の教室に参加している人は自分の健康のために参加しているのであって、人のために行うボランティアと、自分の介護予防が結びつくというところの理解が得られるのかは疑問に感じる。

### ◆特別養護老人ホームのサービスの現状について

介護施設が人手不足の中でケアを行っていることは感じており、本来は必要な人員を介護保険財政で雇用できるようにしていくべきだが、それが十分にできてない。今後はその現状から脱出していかないといけないと感じるが、既に各介護施設にボランティアは浸透しており、ボランティアなしに特別養護老人ホームは動いていかないのではないかと。

### ◆京都市のボランティアの現状について

京都市にはボランティアセンターがありボランティアをあっせんしているが、もともと地縁の強い土地柄なので、地域がボランティアを展開していて、それをボランティアセンターが管理するという形が多い。

各介護施設がどうボランティアとつながっているかの実態は把握していない。

◆今後増加していく独居高齢者への支援の方向性について

京都市でも平成 12 年から 17 年の 5 年間で一人暮らし高齢者が約 9,500 人増加している。独居の方への見守り的な施策としては、まず、京都市長から委嘱され、一人暮らしの方に声かけしていく老人福祉員が 1,314 人おり、活動報告は必ず市にフィードバックされている。老人福祉員は一人暮らしの方を把握するところからやってもらっている。

また、平成 21 年 10 月から「一人暮らしお年寄り見守りサポーター」制度を創設し、顔なじみのお年寄りへの目配りをし、支援が必要そうな方を地域包括支援センターにつなげるボランティアを 2,000 人以上養成した。

行政が災害時に備え把握しているのは、住民基本台帳に行政施策の情報を加えた情報であるが地域には提供されておらず、実際に一人暮らしの方がどのぐらいどこにお住まいなのかは、データとしては持っていない。

今後は、京都の強みである「自治の精神」を生かし、地域における関係団体等の見守り・福祉活動と、保健福祉サービス、介護・医療施設等との有機的なネットワークの構築を進め、一人暮らし高齢者が孤立することなく、「地域による見守り」を実感できるような地域包括ケアシステムの構築を目指すとしている。

今後一人暮らしの高齢者が爆発的に増えるという危機感を持っているが、その方たちの介護予防について地域包括支援センターがどこまで主体的に関与するか等の検討は今後の課題である。地域介護予防推進センターは利用者が伸びており、事業に幅も持てると思うが、平成 22 年度から専任スタッフを 1 人増員して、各センター 2 人体制にした。

また、国の要綱改正を受け二次予防事業対象者が増加すると見込まれていることから、平成 23 年度には会場使用料の助成など新たに予算計上し、増加する需要に対応していく。

《考 察》

ボランティアについてはすでに介護施設に浸透しているという認識をもっているが、ボランティアと介護予防を結びつける発想については疑問も感じているようである。

「自治の精神」を生かした地域包括ケアシステムの構築を目指すという意味では、介護サービス施設も自らが能動的にネットワーク構築を行っていくことが期待されると考えられる。

また、二次予防事業対象者の増加が見込まれるが、ボランティアを行うことが介護予防につながるというエビデンスが得られれば、一次予防でなく二次予防事業として、こうした事業を行うことも可能なのではないかとと思われる。閉じこもり予防には週 1 回以



上の外出が効果的であることが知られているが、週 1 回以上のボランティアであれば、少なくとも閉じこもり予防の効果は期待できる。

## V 京都市伏見区役所醍醐支所福祉部 支援課・介護課

京都市伏見区役所醍醐支所福祉部 支援課・福祉介護課

調査対象者：支援課／課長、支援第二係長

福祉介護課／課長補佐、係員

### ◆ 管内の高齢福祉の現状について

管内で、特別養護老人ホームにすぐに入居できる人はあまりなく、ほとんどの方は入居何年待ちという状況で、多くの要介護高齢者は在宅で生活されており、その方たちの在宅生活をどう支えるのが最優先課題であり、2 箇所の地域包括支援センターが核となり日々対応している。

また、人口の約半数の方が公営住宅にお住まいで、生活保護率も市内でダントツに高く、処遇困難家庭も多く、福祉部ではそうした方への対応で手一杯にある。

介護施設のサービスの質や従事者の処遇を向上させるだけでなく、福祉に関わるすべての人々の環境改善をする必要があると感じている。

### ◆ 一人暮らし高齢者の把握やみまもりについて

各学区の民生委員を始め、京都市独自に市長が委嘱する老人福祉員が家庭訪問したり、地元自治会による見守り隊やサポーター制度があり、生活実態の把握に努めている。ただし、在住ベースで一人暮らしの人を把握した名簿はない。

### ◆ 管内でのボランティアの現状について

もともと地域の結びつきが強い土地柄なので、「自分のことが分からなくなったおじいさんが町内にいるがどうしたらいいのか」など、行政につないでくれたり、ボランティアセンターを介さず、民生委員や自治町内会を中心に地元での助け合い活動が多くなっている。その他にも地域の見守り隊や小学校のおやじの会などがボランティア活動を行っていたりする。

ただ、地域活動の担い手が高齢化しており、他の地域では地元大学とコラボして若い人がボランティア活動を行ったりしているが、醍醐管内には大学がなく、高校も府立高校が一つあるのみで、危機感を抱いている。今後の次世代の地域福祉の担い手をどうするかは課題である。また、各介護施設では、レクリエーション活動の手伝いなどでボランティアをすでに導入しているところもある。

### 《 考 察 》

管内の様々な課題から、介護サービス施設と地域との連携については政策の優先度としては低いようである。もともと地域の結びつきが強い土地柄ということもあり、ボ

ランティアはすでに行われているが、将来的には地域活動の担い手の減少が危惧されている。

## VI 特別養護老人ホーム同和園

調査対象者：主任ケアワーカー2人 副主任相談員 ショートステイ主任

◆特別養護老人ホームやショートステイにおいて、どのような時間帯にボランティアに来てもらいたいのか。

朝 7 時～10 時まではほぼ一人になるユニットもあるので、朝の時間の見守りなどはお願いしたいと思うが、ワーカーの配置が厚くなっている時間帯でないと、仕事を振り切れないという課題もある。

◆ボランティアの現状について

ショートステイにはご家族を中心としたボランティアのグループが関わってくれている。デイサービスにも地域の方がフラダンスや大正琴で訪問してくれる。特養では月 1 回窓ふきに来てくださる会、年 2 回の清掃に来てくださる会、月 1 回程度折り紙や料理等のグループワークに来てくださる会がある。ただ、定員が 288 人の特別養護老人ホームなので、それぞれのユニットには年に 1 回ぐらいの関わりとなってしまう。個人のタオルたたみや傾聴ボランティアなどの関わりもある。

また、地域とのつながりという点でいえば、館内の道場を居合や子育て支援のサークルに貸し出していたりもする。

◆ボランティアの意義についてどのように考えているか

開かれた施設でありたいという思いは常にあり、ボランティアの方には大いに入ってもらいたいと思う。また、ユニット化すると、ともすると自分のユニット見えなくなってくる面もあり、地域のいろいろな方と交わることで、現場のワーカーを育てるという意義もあると感じる。

また、ボランティアで施設に来る方にとっても、介護が必要になったときに頼れる場所が地域にあることを知ってもらえる面もあると思う。

今年度から施設見学会を行ったが、地域の見学者は「こんなに広かったんだ」「カフェもあるんだ」などと驚かれていた。地域に対する施設の間口はやはり狭かったのだと思った。ボランティアによって施設の間口が広がる可能性もあると思う。

ショートは元教師の方などが利用されていることも多いが、今の若いワーカーの「やさしさ」だけでは提供できないサービスもあると感じる。製作活動にしても若いワーカーが「大人の製作活動」とは何かという視点をもつのは難しい面もあり、年配のボランティアの方への期待はある。

◆これまでボランティアがなかなか根付いていないのはなぜだと思うか

コーディネーターとボランティアに対するフォローができていなかったからだと思う。ボランティアコーディネーターをきちんと入れないと難しいと思う。事前段階の教育体制なども作らないといけないと思う。

◆ボランティアのメリットについてのブレインストーミング

ボランティアが入ることによって①施設 ②入居者 ③ボランティアにとってそれぞれのどのようなメリットがあると考えられるか

①施設のメリット
・助かる ・閉そく感がなくなる ・風通しが良くなる ・地域の中の施設という意識が持てる ・さまざまな方と交流することで職員の育成が期待できる ・施設としての緊張感が高まる ・職員数が限られている中で、職員のモチベーション維持につながる ・施設が「特別なもの」でなくなる ・コーディネーターさえきちんとしていれば手助けしてもらえる ・分散された仕事ができる
②入居者のメリット
・安心感が持てる ・満足度が高まる ・生活の幅が広がる（歌一つにしても、現場の 20 代の職員と歌うのと、共通の話題がある 50 代、60 代の人と歌うのは違う） ・介護職員⇒入居者の一方通行ではなくなる ・職員の中には、入居者と共通体験がない、生活上の会話ができない若い世代が増えているので、そういう面をカバーしてもらえと思う ・職員は週 2 回の入浴の基準をクリアすることで精いっぱいになっているが、入居者が求めている「楽しみ」の提供につながると思う ・ショートを利用していた人が特養に入る時、現状では涙を流しながら入ることが多いが、それはこれまでの生活や地域から疎外されるからだと思う。ボランティアが来てくれることにより疎外感は軽減できると思う ・入居者の個性にあわせたケアが実現しやすくなる ・生きることへの意欲が出てくるのではないかと ・隣近所同士の付き合いが維持できる ・入居者にとっても施設が特別なものでなくなるのではないかと
③ボランティアのメリット
・ボランティアをする動機によってメリットも違うのではないかと ・ボランティアをすることで将来の自分の姿を想像しやすくなり、備えられる ・自分の人生の最後が見れて、死への不安が軽減できる ・知的満足度を高められる ・自分らしさを探することができる ・生きがいになる ・父が定年後、緑のおじさんをやり始めたが、雨の日もボランティア優先で合羽を着てやっている。自分を必要としてくれている場所があることは大切 ・生活リズムが保てる ・糖尿病などの人もボランティアに来て施設で糖尿病食を食べれば、健康維持につながる ・介護予防につながる ・ボランティア自身が自分の力を確認できて、生きていく力につながる

#### 《考 察》

ブレインストーミングを通じ、ボランティアを受け入れるメリットが、入居者、ボランティア、施設の三者すべてに大きいということが再認識された。今後ボランティア活動を通じた地域との連携を図っていくためには、ボランティアコーディネーターを置くことはもちろん、職員・ボランティア双方の教育体制を構築していくことがポイントになると考えられる。

## Ⅶ 特別養護老人ホーム同和園

調査対象者：ユニットリーダー2名

### リーダーAさん

◆ボランティアが入るとしたら来てもらいたい時間帯は？

食事時間。特に朝・晩が手薄。食事介助や後片付けはともかく、配膳や下膳はしていただけたら助かる。理想を言えば朝7時～夜7時ぐらいまで常時1人のボランティアさんがいてくれること。職員はもう1人いてくれることで、気持ちに余裕ができると思う。

◆ボランティアに期待することは

職員よりも人生経験が豊富で、入居者さんと上手にコミュニケーションをとったりできると思う。職員がボランティアさんから学べると思う。

◆ボランティアが入ったときに不安なことは

大きな事故につながらないかが心配。

### リーダーBさん

◆ボランティアが入るとしたら来てもらいたい時間帯は？

ボランティアの内容によって希望する時間が異なる。入居者さんのケアはユニットの職員で行っているの、落ち着いた時間から来てもらえればよい。

適正な人数は良く分からないが、一緒に食事をしたり、一緒にいる時間を増やしてほしい。

◆ボランティアに期待することは

現状、入居者が一人で過ごす時間が多くなっているが、職員から話しかけられれば、お話ししてくれる方が多いので、入居者さんにとって園外の方との交流は刺激になるし、話し相手になってくれると思う。

年齢的には65歳以上の方でも問題ないと思う。気が利きすぎる方がいると必要以上のことをやろうとされるかもしれないが、ボランティアを受け入れる職員の負担以上に、入居者さんに返せることの方が多いのではないかな。

◆ボランティアが食事を一緒にとることについてはどう思うか

職員は入居者さんと食事を一緒取るのは難しいので、ボランティアさんが会話をしながら食べていただくのはいいと思う。テーブルによっては1人とか2人で食べている方もいらっしゃるの、話の内容も若い職員よりも入居者さんに近いと思う。

## 《考 察》

現場のユニットリーダーもボランティアの必要性を認識できており、人手としてのとらえ方より、若い職員では難しいコミュニケーションの部分に期待が大きいことが分かる。体は少し虚弱でも、入居者とのコミュニケーションがはかれる中高年世代ほど、若い現場の職員からはボランティアとして求められているということが考察された。

## Ⅷ ヒアリング調査全体考察

今回ヒアリングを行った社会福祉法人同和園においては、地域との連携を強めるべきであるという認識は強く、その一つの方法としてのボランティアの重要性、必要性も認識できていた。しかし、実際にボランティアの受け入れを能動的に行うまでにはいたっていないということであった。

職員の言葉の中にもあったが、現場は今、20代の若い職員が中心となっており、運営基準を満たすサービスを提供することだけでも手いっぱいの状況の中、ボランティア受け入れを成功させるためには、専任のコーディネーターを置き、ボランティア活動が継続して行われるような受け入れ態勢を作ることが鍵になると考えられる。

それと同時に、地域連携やボランティアの重要性、必然性をパート職員も含め職員全員に浸透させ、受け入れを継続していくための職員教育の仕組みづくりが必要であろう。

また、行政、介護予防推進センター、地域包括支援センターについては、各所が現状の業務で手いっぱいの中、介護サービス施設等の地域との連携の必要性は認識されているものの、喫緊の課題としては取り上げられていないと感じられた。

介護予防については京都市の場合二次予防に重点が置かれており、一次予防としては介護予防のための教室や相談会、地域での自主的な介護予防活動の支援を実施している。

今後、介護サービス施設等の地域との連携を推進していく上では、一般高齢者をターゲットに行うよりも、高齢者人口の増加に比例して増える二次予防が必要な特定高齢者に照準をあわせて展開していく方が、保険者のもつ課題に答えられる可能性が高いと考えられる。



### ③アンケート調査 実施状況一覧

#### 1) 施設職員アンケート

調査対象：社会福祉法人同和園職員（特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、  
デイサービス、ショートステイ）

調査期間：平成 22 年 12 月 10 日～20 日

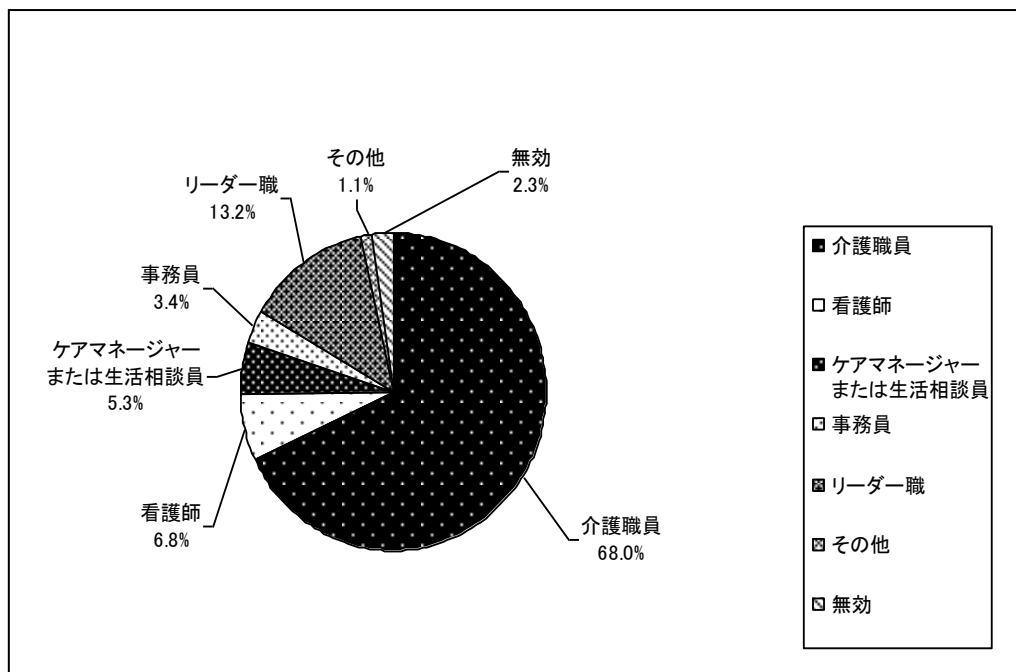
調査方法：社会福祉法人同和園のフルタイムパート、正職員の全員（277 人）  
無記名、職員へは直接配布、

回収率：有効回収数 266 回収率 96.02%

設問1 あなたの職種は何ですか

- a. 一般介護職員      b. 看護師
- c. ケアマネジャーまたは生活相談員      d. 事務職員
- e. リーダー職(ユニットリーダー、フロアリーダー以上の役職、看護リーダーなど)
- f. その他      x. 無効

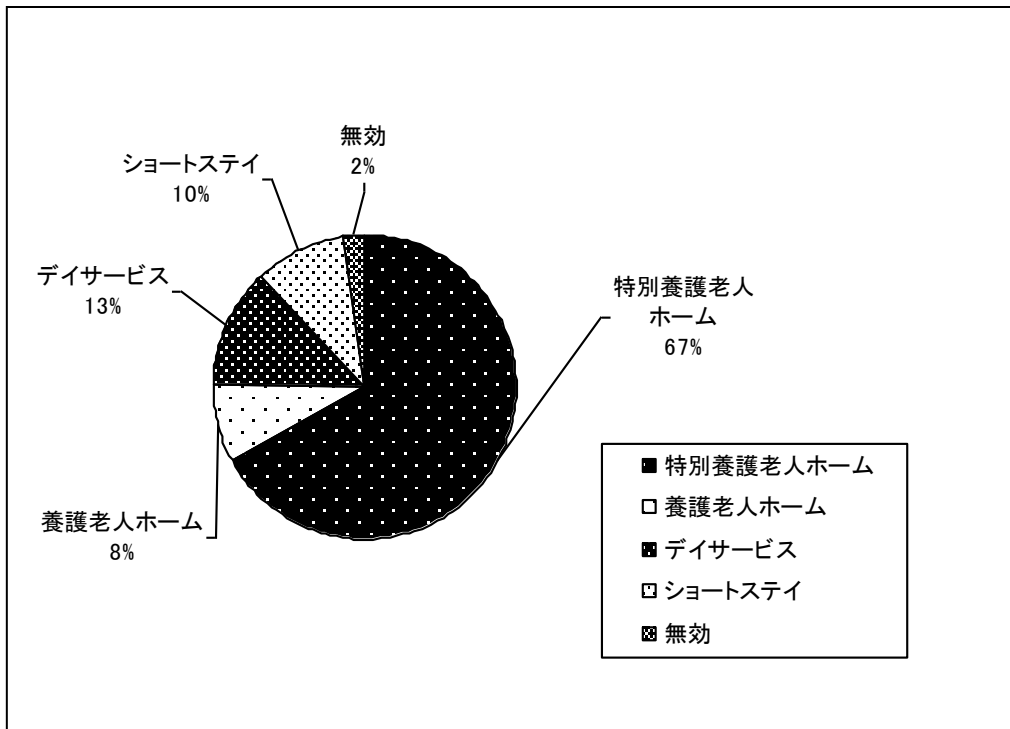
	a	b	c	d	e	f	x	計
件数	181	18	14	9	35	3	6	266
構成比	68.1	6.8	5.3	3.4	13.2	1.1	2.3	100.0



設問2 あなたが働いているのはどの事業所ですか。

- a. 特別養護老人ホーム
- b. 養護老人ホーム
- c. デイサービス
- d. ショートステイ
- x. 無効

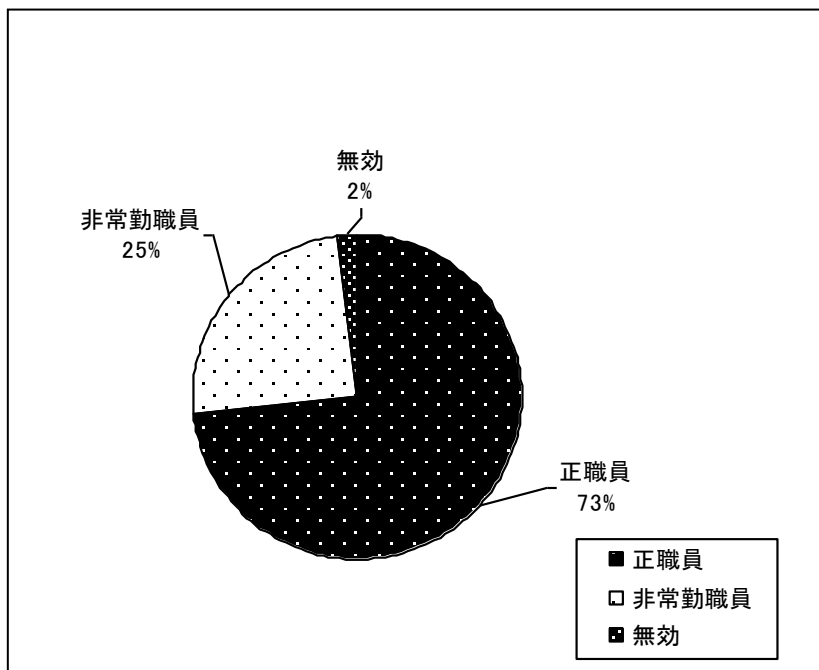
	a	b	c	d	x	計
件数	178	22	34	26	6	266
構成比	66.9	8.3	12.8	9.8	2.3	100



設問3 あなたの勤務形態を教えてください。

- a. 正職員
- b. 非常勤職員
- x. 無効

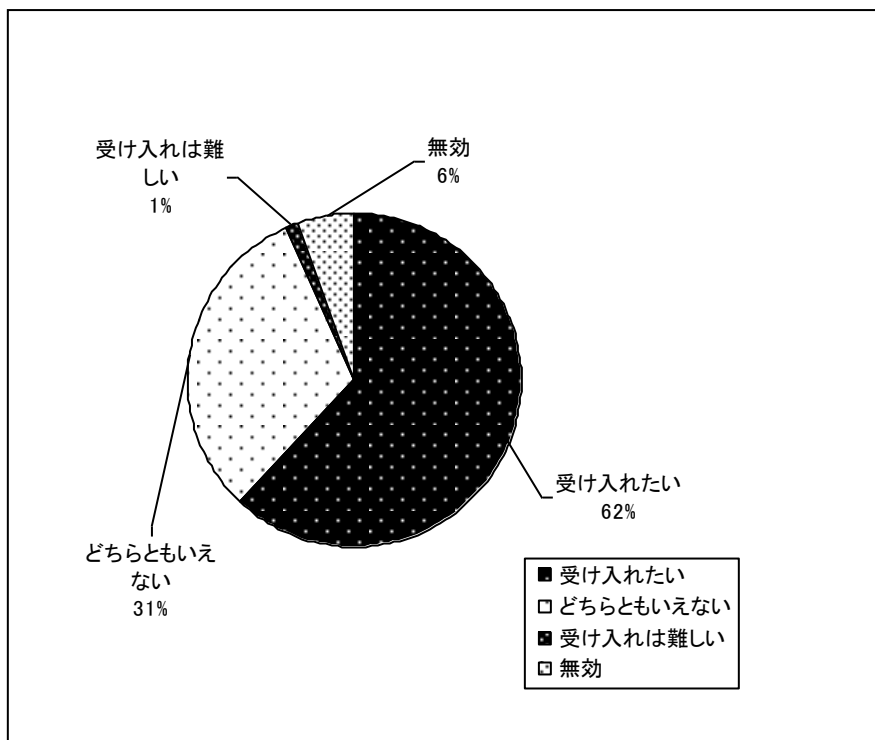
	正職員	非常勤職員	無効	計
件数	195	66	5	266
構成比	73.3	24.8	1.9	100



設問 4. あなたは 65 歳以上の方のボランティアの受け入れについてどう思いますか。

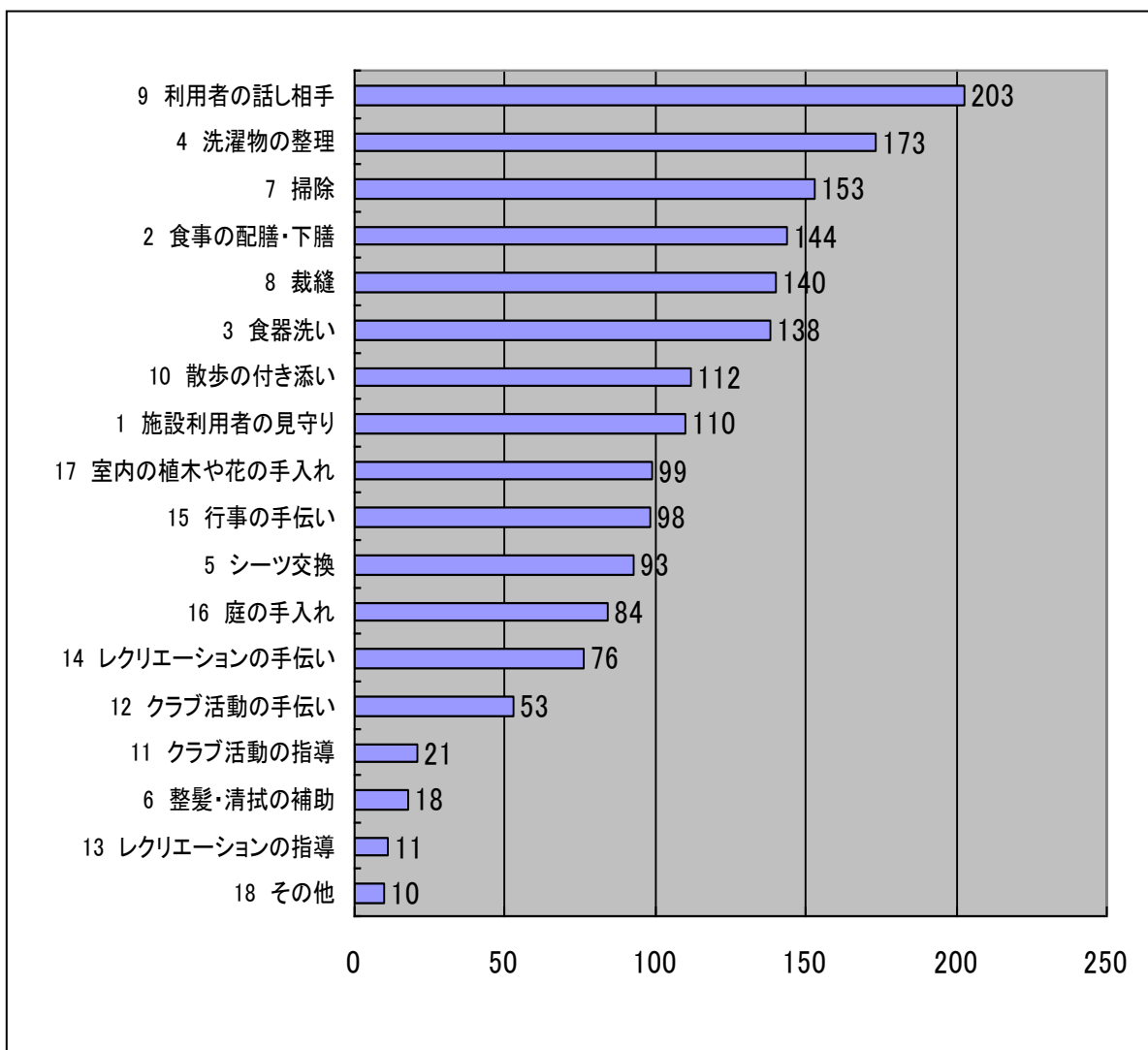
- a. 受け入れたい
- b. どちらともいえない
- c. 受け入れは難しい
- x. 無効

	受け入れたい	どちらともいえない	受け入れは難しい	無効	計
件数	165	83	3	15	266
構成比	62.0	31.2	1.1	5.6	100



設問5 あなたは 65 歳以上のボランティアにどのようなことをしてもらいたいですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

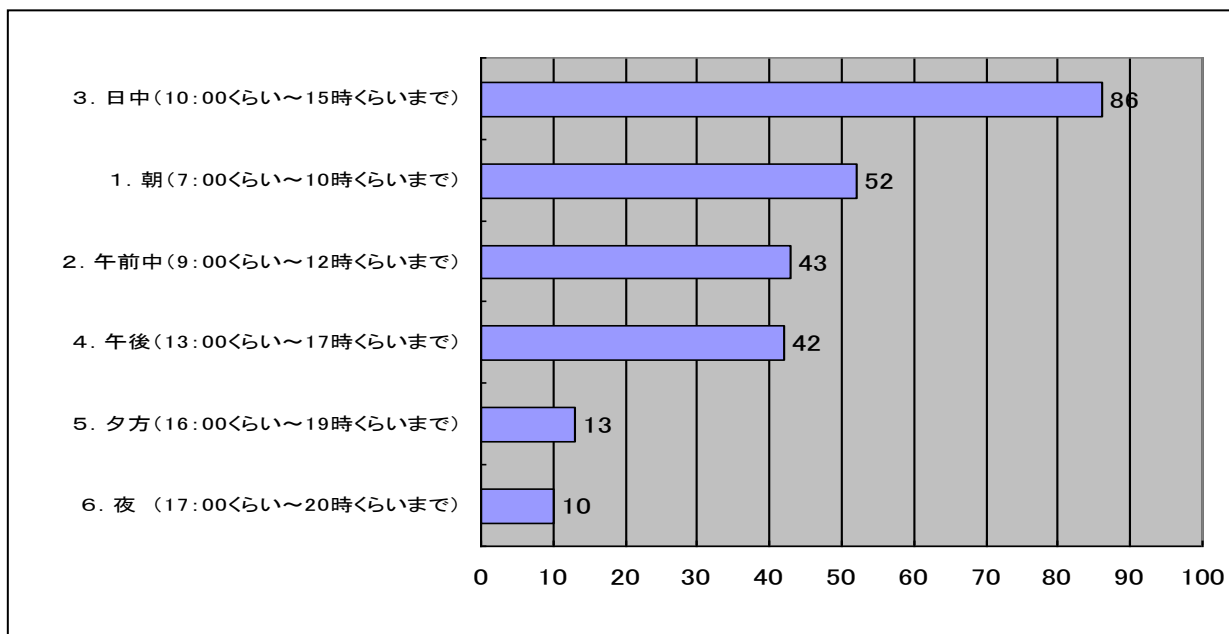
- 1. 施設利用者の見守り    2. 食事の配膳・下膳    3. 食器洗い
- 4. 洗濯物の整理    5. シーツ交換    6. 整髪・清拭の補助    7. 掃除
- 8. 裁縫    9. 利用者の話し相手    10. 散歩の付き添い    11. クラブ活動の指導
- 12. クラブ活動の手伝い    13. レクリエーションの指導
- 14. レクリエーションの手伝い    15. 行事の手伝い    16. 庭の手入れ
- 17. 室内の植木や花の手入れ    18. その他



設問6 65歳以上のボランティアに来てもらうとしたら、最も来てほしい時間帯はいつですか。

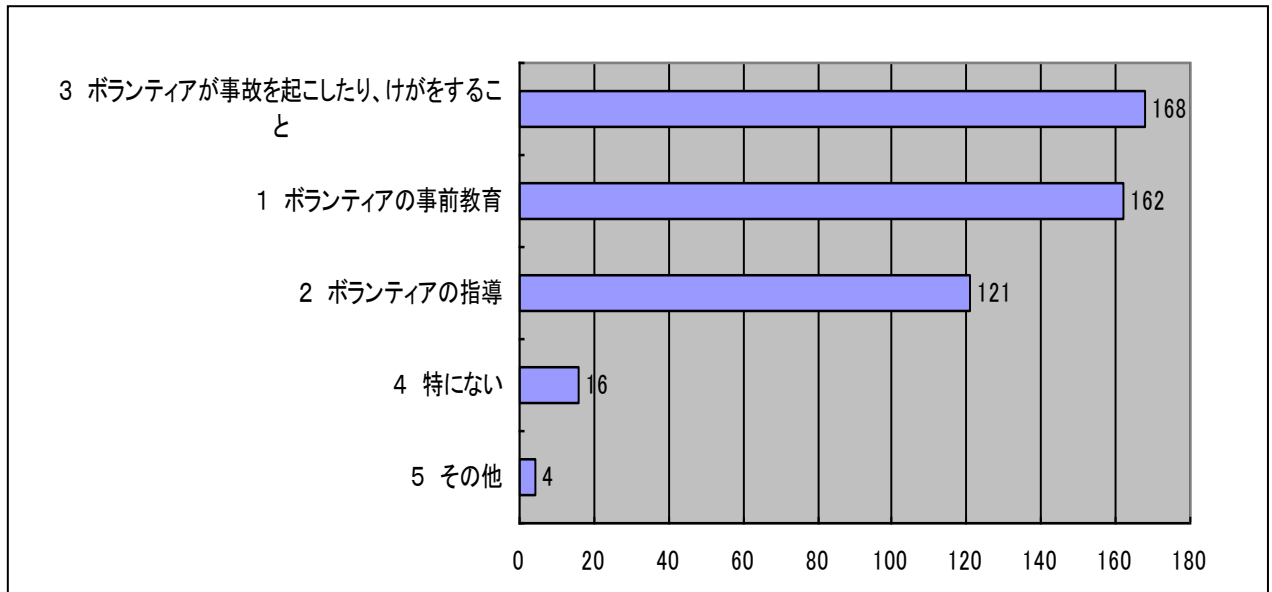
【回答】各時間帯の第1順位の数

- |                          |     |
|--------------------------|-----|
| 1. 朝(7:00くらい～10時くらいまで)   | 52名 |
| 2. 午前中(9:00くらい～12時くらいまで) | 43名 |
| 3. 日中(10:00くらい～15時くらいまで) | 86名 |
| 4. 午後(13:00くらい～17時くらいまで) | 42名 |
| 5. 夕方(16:00くらい～19時くらいまで) | 13名 |
| 6. 夜(17:00くらい～20時くらいまで)  | 10名 |



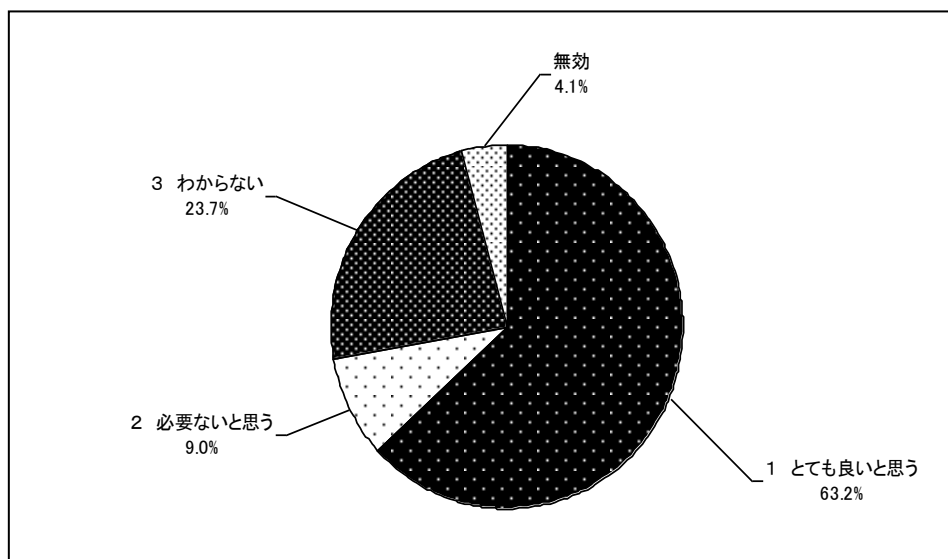
問7 ボランティアの受け入れについて不安を感じる点は何ですか？あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. ボランティアの事前教育(守秘義務やボランティアの心構え、活動内容のレクチャー等)
2. ボランティアの指導
3. ボランティアが事故を起こしたり、けがをすること
4. 特にない
5. その他



設問8 65歳以上のボランティアに対してお礼を兼ねて、施設から食事を提供することについてどう思いますか。

1. とても良いと思う
2. 必要ないと思う
3. 分からない



## クロス集計

「介護サービス施設等の地域との連携のあり方」に関する

### 職員アンケート調査

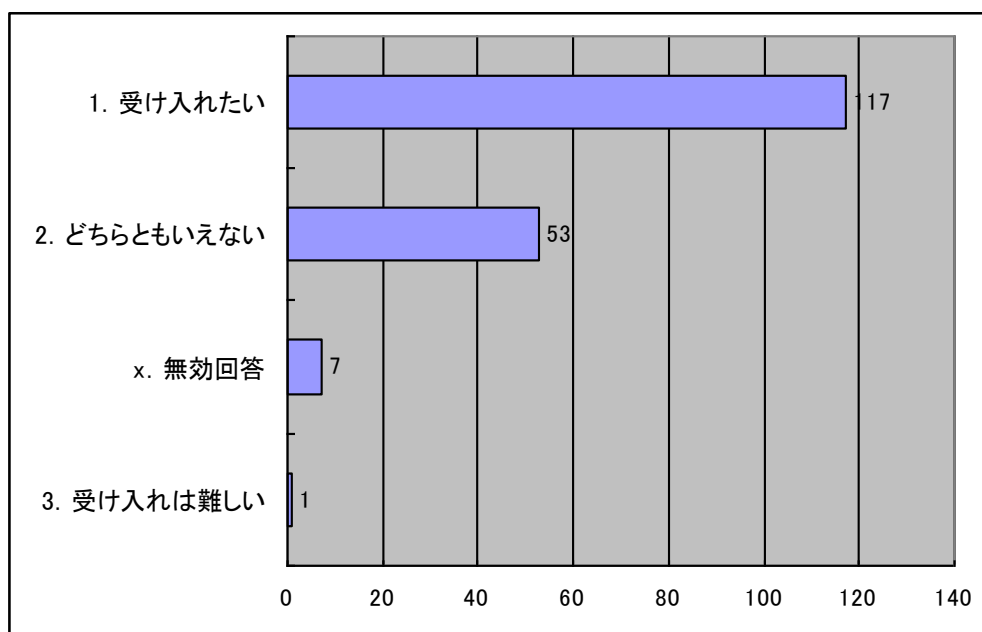
#### 特別養護老人ホーム職員 集計結果

実施期日：2010年12月

(N=178)

設問4 あなたは65歳以上の方のボランティアの受け入れについてどう思いますか。

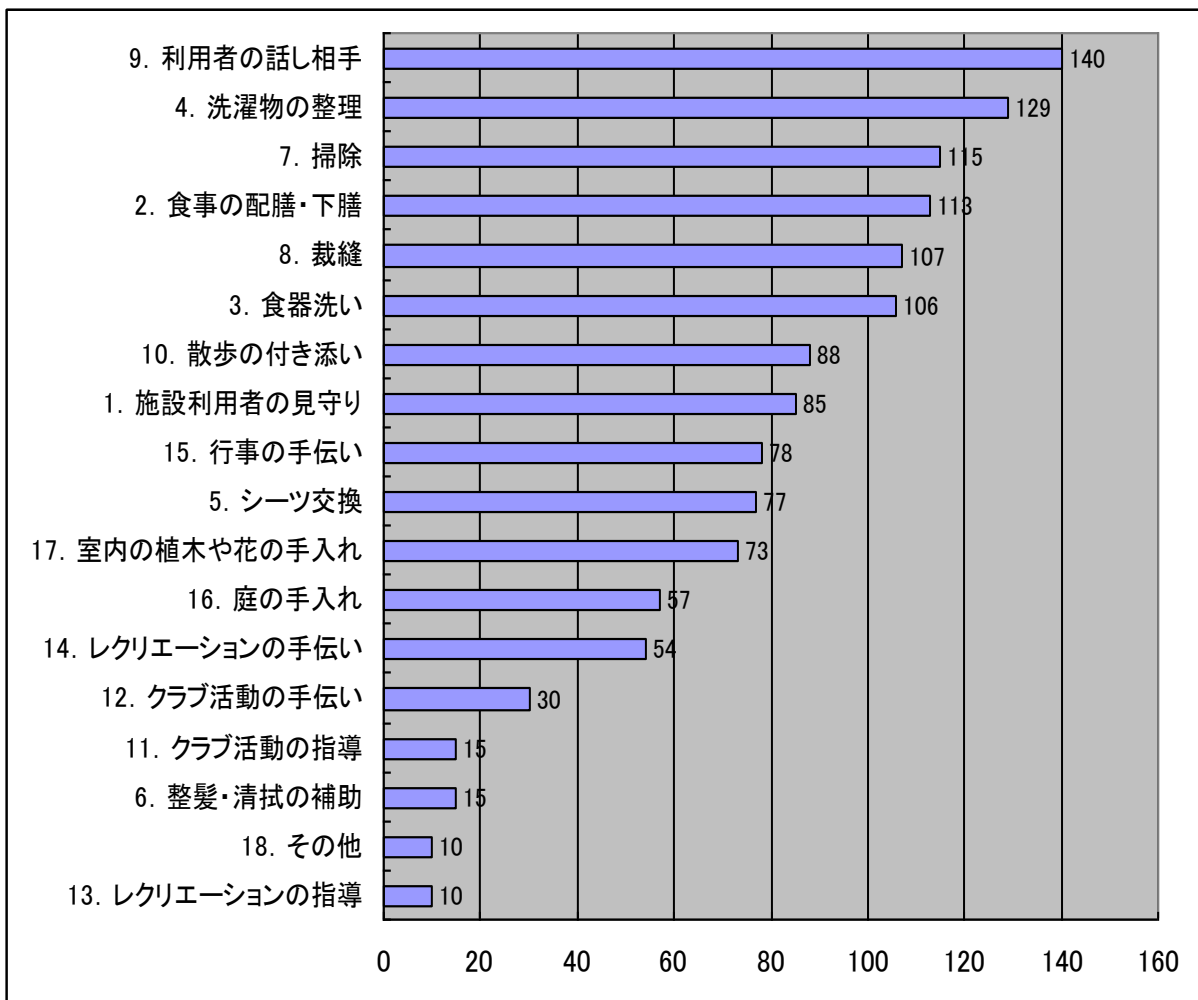
- 1. 受け入れたい
- 2. どちらともいえない
- 3. 受け入れは難しい
- x. 無効回答





設問5 あなたは65歳以上のボランティアにどのようなことをしてもらいたいですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- 1. 施設利用者の見守り    2. 食事の配膳・下膳    3. 食器洗い
- 4. 洗濯物の整理    5. シーツ交換    6. 整髪・清拭の補助    7. 掃除
- 8. 裁縫    9. 利用者の話し相手    10. 散歩の付き添い
- 11. クラブ活動の指導 ※①    12. クラブ活動の手伝い
- 13. レクリエーションの指導 ※②    14. レクリエーションの手伝い
- 15. 行事の手伝い    16. 庭の手入れ    17. 室内の植木や花の手入れ
- 18. その他 ※③



※① 「11. クラブ活動の指導(具体的に)」

- ⇒ 1) カラオケ。  
2) 書道、手芸。  
3) 昔の歌。  
4) そのボランティアの方が得意とされてきたこと(英語、習字、俳句、囲碁)。  
5) 遊びを一緒にする。  
6) 刺し子とか若い人が知らないようなこと。  
7) 習字、縫い物。  
8) 生け花、裁縫。

※② 「13. レクリエーションの指導(具体的に)」

- ⇒ 1) 外出  
2) 若い職員からの目線ではなく、その方の目線や考え方で行ってほしい。

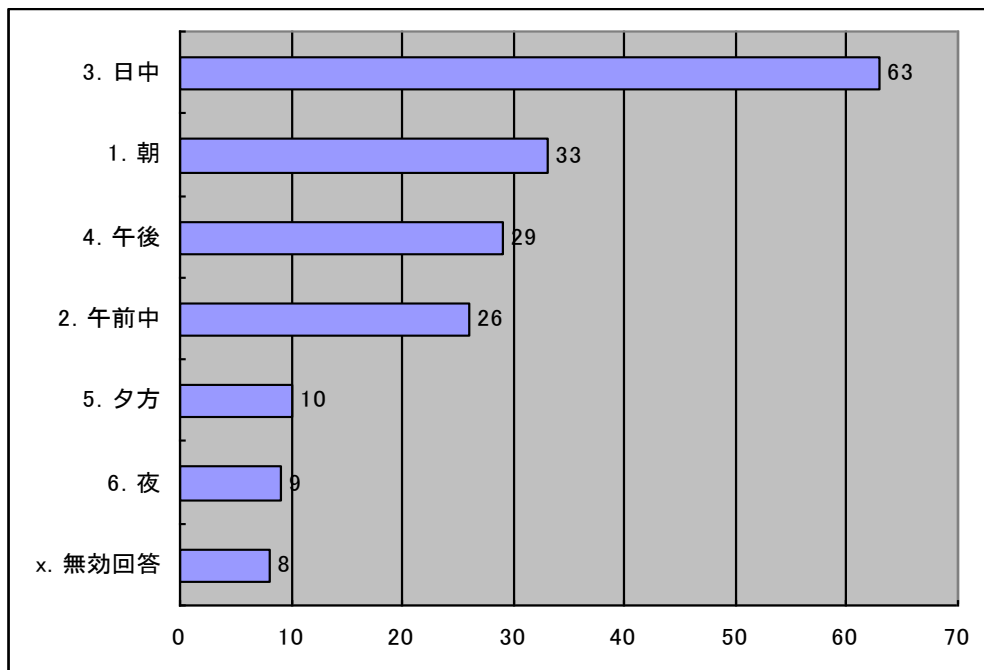
※③ 「18. その他」

- ⇒ 1) 車いす、シャワーチェアの洗浄、手入れなど。  
2) 一緒に楽しい時間を作れれば。  
3) 65歳とひとくりにいっても、能力、経験が違う。  
4) その方の得意なこと。  
5) 生活する上での基本的なマナーや昔からのしきたりなど、人生の先輩として教えていただきたい。  
6) 気づき等の記録を残す。  
7) 食事介助。  
8) 私達の知らない昔の話を教えてほしい、また、ご利用者様と一緒に話をしてほしい。

設問6 65歳以上のボランティアに来てもらおうとしたら、最も来てほしい時間帯はいつですか。

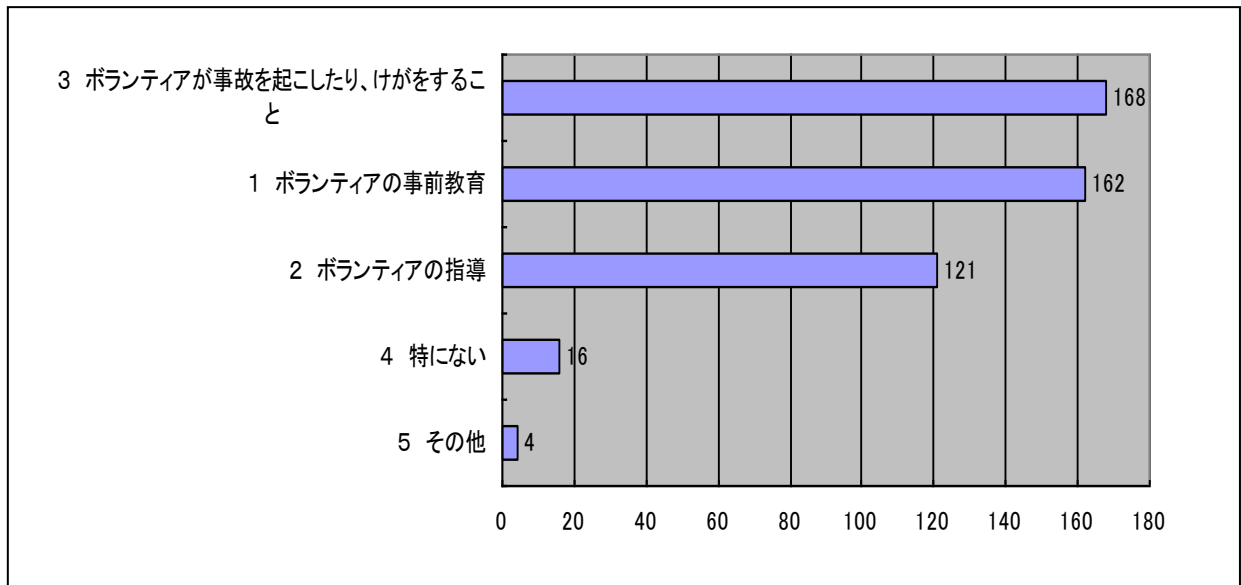
【回答】各時間帯の第1順位の数

1. 朝(7:00くらい～10時くらいまで)	33名
2. 午前中(9:00くらい～12時くらいまで)	26名
3. 日中(10:00くらい～15時くらいまで)	63名
4. 午後(13:00くらい～17時くらいまで)	29名
5. 夕方(16:00くらい～19時くらいまで)	10名
6. 夜(17:00くらい～20時くらいまで)	9名
X. 無効回答	8名



問7 ボランティアの受け入れについて不安を感じる点は何ですか？あてはまるものすべてに○をつけてください。

1. ボランティアの事前教育(守秘義務やボランティアの心構え、活動内容のレクチャー等)
2. ボランティアの指導
3. ボランティアが事故を起こしたり、けがをすること
4. 特にない
5. その他



「その他」① 一人ひとりの利用者のことがあまりわからない。

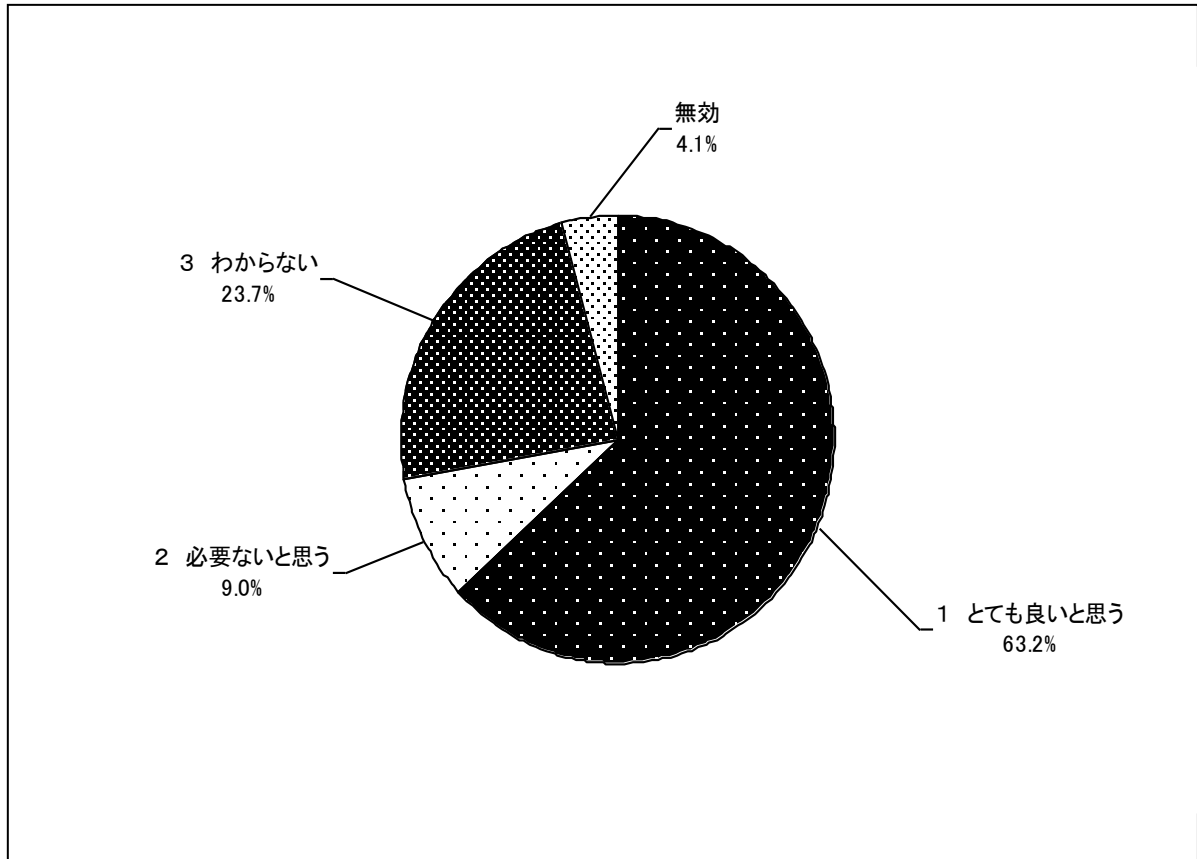
② 些細なトラブルにまきこまれないか・・・。

③ 様々な疾病や生活歴のある方との関わりについてユニットスタッフにお任せすると  
いった丸投げ的な受け入れはお互いにとっていいやり方でないと思う。

④ 身体的な問題。

設問8 65歳以上のボランティアに対してお礼を兼ねて、施設から食事を提供することについて  
どう思いますか。

1. とても良いと思う
2. 必要ないと思う
3. 分からない



## 《考 察》

職員の62%が65歳以上のボランティアを受け入れたいと考えており、職員がボランティアについて前向きな様子うかがえた。

また、ボランティアに期待する活動としては、利用者の話し相手がトップにあがり、ボランティアを人手としてとらえているのではなく、利用者の生活の幅を広げたり、利用者の楽しみ、つまり精神ケアの部分で活躍してほしいと考えている様子うかがえた。

若い職員たちが、自分たちのできることとできないことを冷静に区別して考えることができしており、ボランティアとの連携を図る上で、こうした自己覚知ができていることは、非常に重要だと考えられる。

2位以下は洗濯物の整理、掃除、食事の配膳・下膳、裁縫と続き、身体ケア以外の環境整備的な部分を頼みたいと考えているようである。

また、ボランティアに来てほしい時間帯としては10時~15時くらいの日中がトップで、比較的職員が多く、ボランティアに対してもきちんと目の届く時間帯を望む職員が現状としては多いようだ。しかし、2位には職員配置が手薄な朝7時~10時くらいが続いており、以下、午前中、午後と続いている。

ボランティア受け入れについて不安なこととしては、回答者の63%にあたる168人が「ボランティアが事故を起こしたり、けがをすること」を挙げている。また、60%をこえる162人が「ボランティアの事前教育」を挙げており、リスクマネジメントと、リスクを軽減するための事前教育の態勢をきちんと整備することが、受け入れのポイントになると考えられる。

特別養護老人ホームの職員のみを取り出して集計したが、職員全体のアンケート結果と比べ、どの項目においても有意差は見られなかった。

## 2) 住民アンケート

調査対象：京都市伏見区北醍醐地区の住民

調査期間：平成23年2月28日～3月10日

調査方法：北醍醐地区の1500戸を無作為に抽出

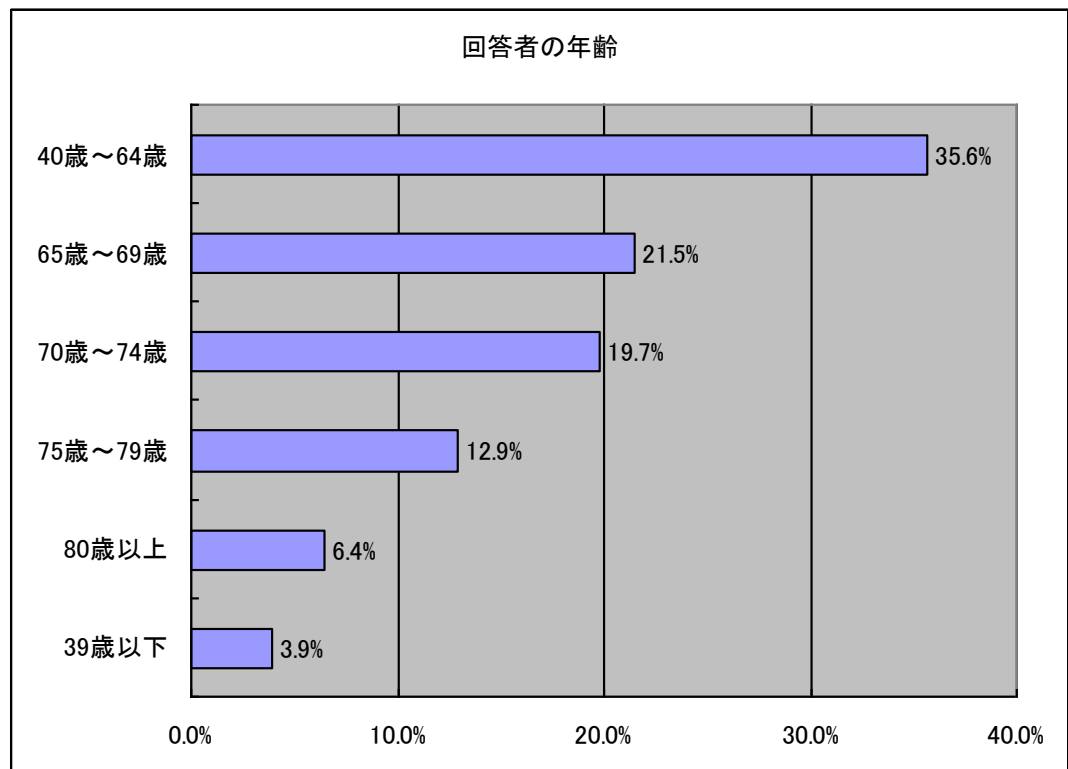
無記名、直接配布、郵送にて回収

回収率：有効回収数233 回収率15.5%

### 【回答者の年齢】

問1 あなたの年代（年齢）を教えてください。

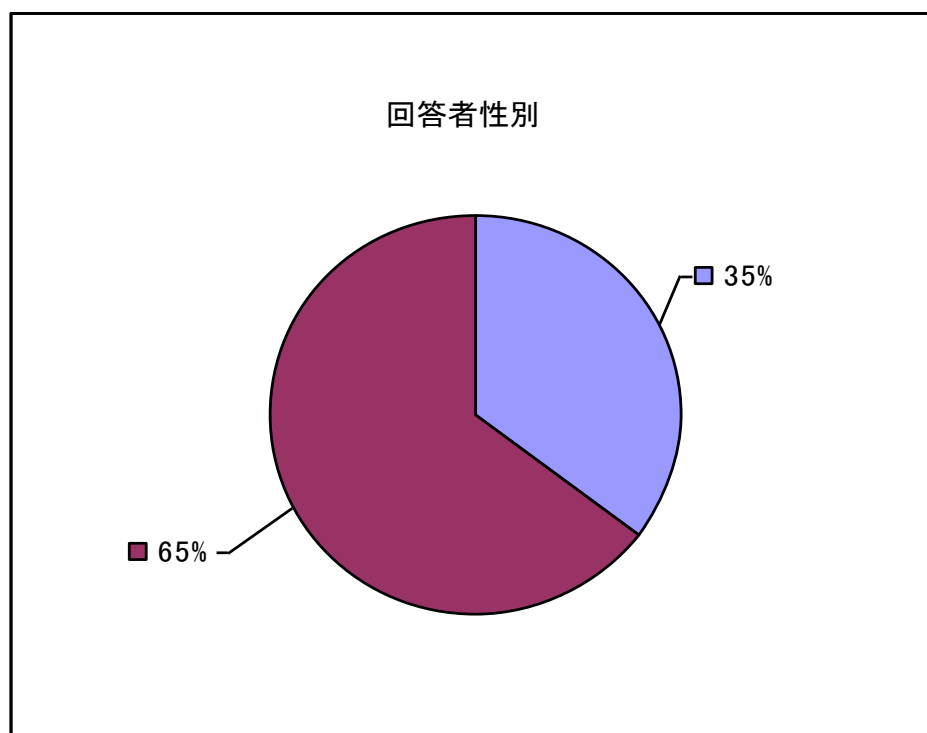
項目	件数	構成比
39歳以下	9	3.9%
40歳～64歳	83	35.6%
65歳～69歳	50	21.5%
70歳～74歳	46	19.7%
75歳～79歳	30	12.9%
80歳以上	15	6.4%
計	233	100.0%



【回答者の性別】

問2 あなたの性別を教えてください。

性別	件数	構成比
男	82	35.2%
女	151	64.8%
計	233	100%

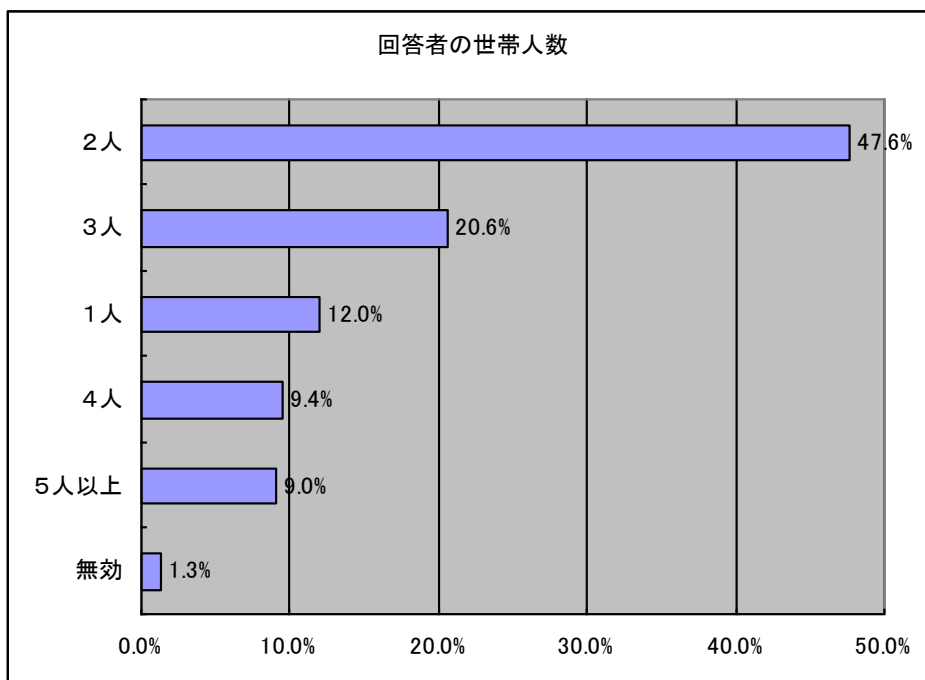




【属性・世帯人数】

問3 あなたの世帯の人数を教えてください。

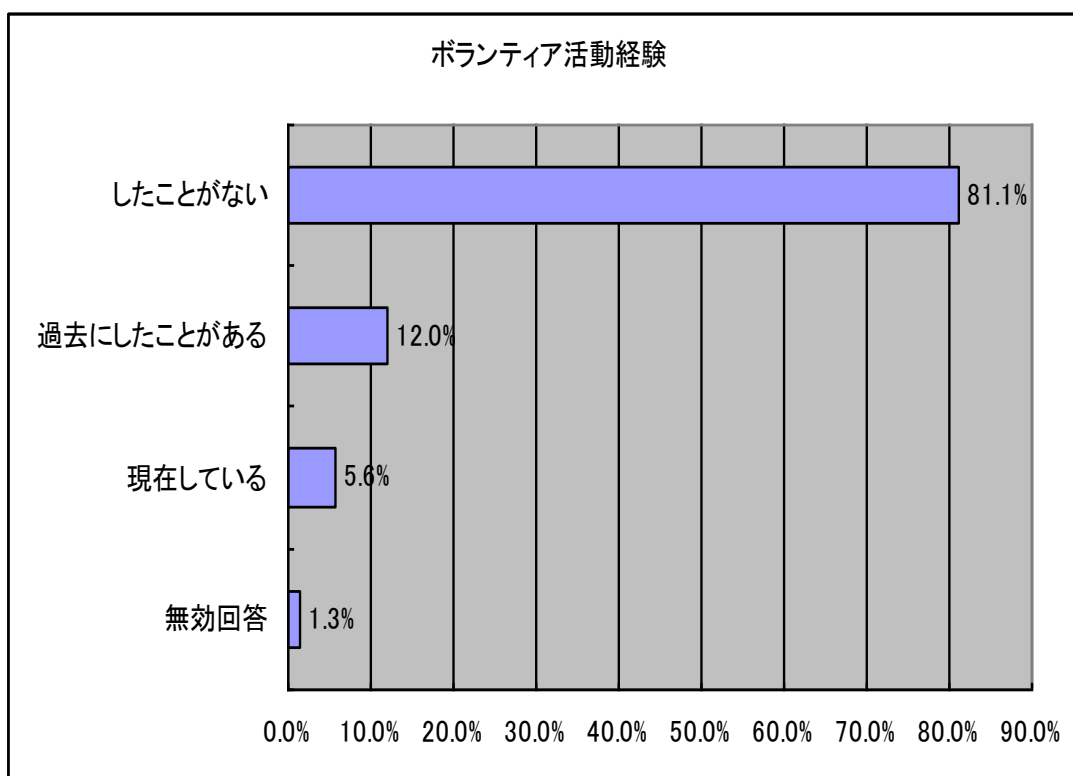
世帯の人数	構成比
1人	12.0%
2人	47.6%
3人	20.6%
4人	9.4%
5人以上	9.0%
無効回答	1.3%
計	



【ボランティア活動経験について】

問4 あなたはこれまで、老人ホームなどの介護施設でボランティア活動をしたことがありますか。

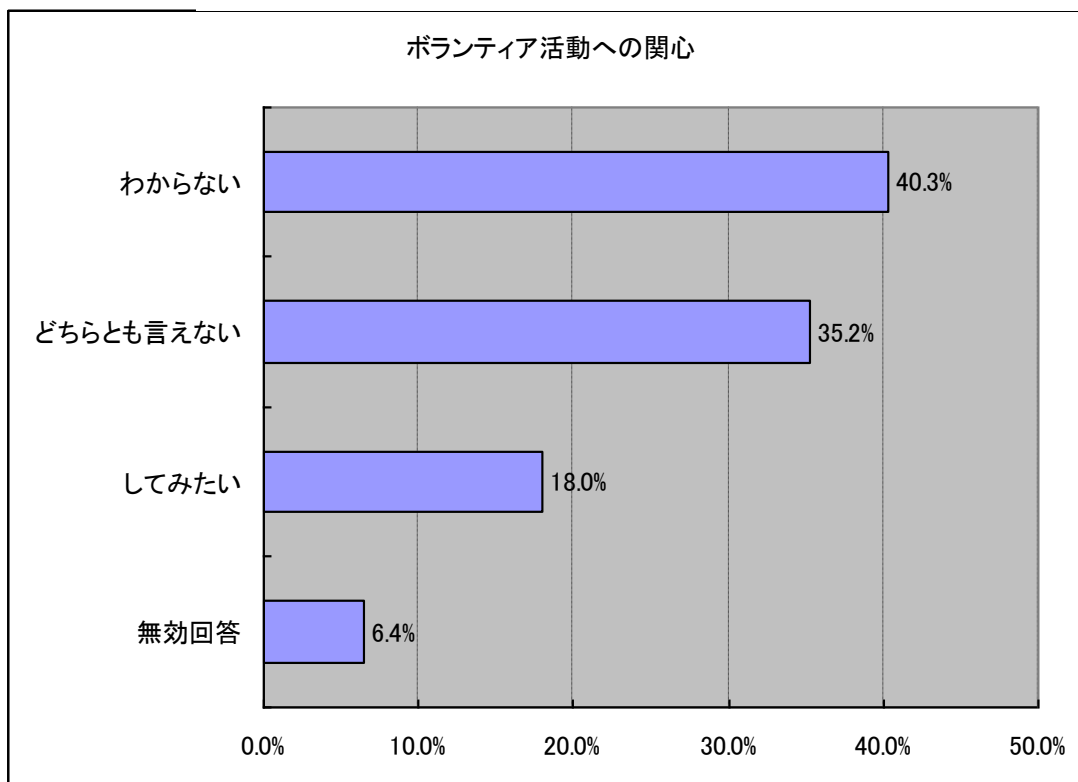
項目	件数	構成比
現在している	13	5.6%
過去にしたことがある	28	12.0%
したことがない	189	81.1%
無効回答	3	1.3%
計	233	100.0%



### 【ボランティア活動への関心】

問5 あなたは老人ホームなどの介護施設でボランティア活動をしてみたいと思いますか。

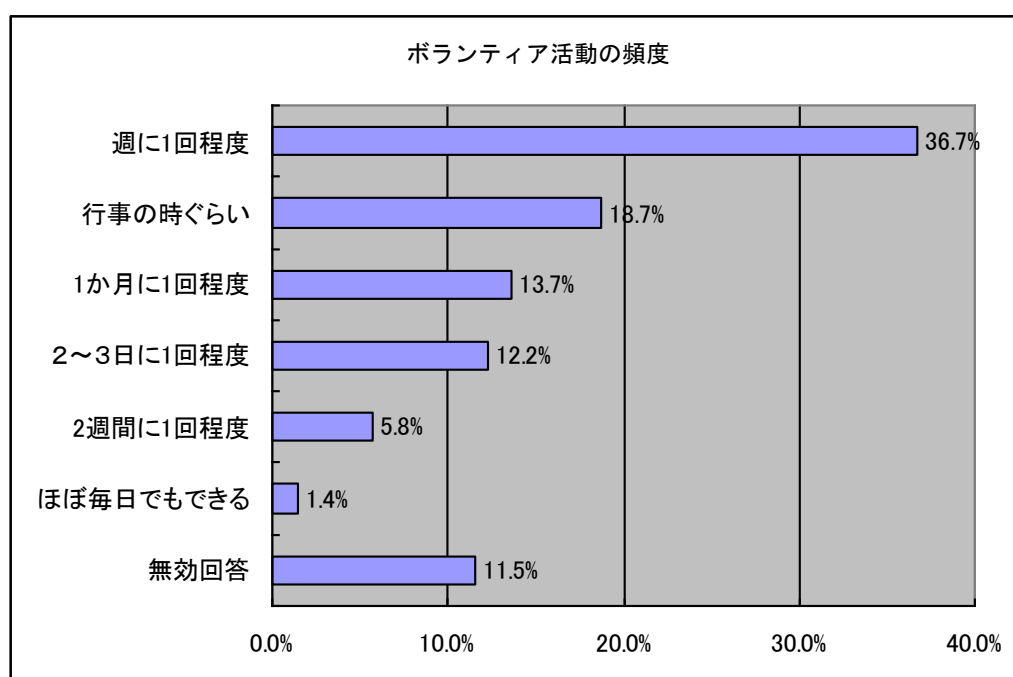
項目	件数	構成比
無効回答	15	6.4%
してみたい	42	18.0%
どちらとも言えない	82	35.2%
わからない	94	40.3%
計	233	100.0%



【ボランティア活動の頻度】

問6 あなたが介護施設でボランティア活動をするとしたら、できる頻度はどれくらいですか。

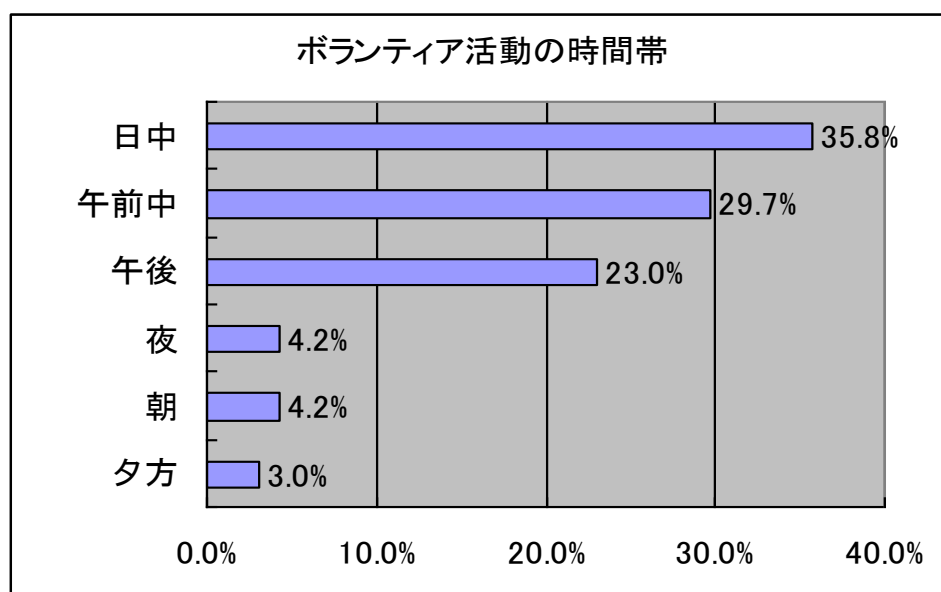
項目	件数	構成比
無効回答	16	11.5%
ほぼ毎日でもできる	2	1.4%
2週間に1回程度	8	5.8%
2～3日に1回程度	17	12.2%
1か月に1回程度	19	13.7%
行事の時ぐらい	26	18.7%
週に1回程度	51	36.7%
計	139	100.0%
非該当	94	



【ボランティアへ活動の時間帯】

問7 あなたが介護施設でボランティア活動をするとしたら、できる時間帯は次のどれですか。

項目	件数	構成比
日中(10時ごろ～15時ごろまで)	59	35.8%
午前中(9時ごろ～12時ごろまで)	49	29.7%
午後(13時ごろ～17時ごろまで)	38	23.0%
夜(17時ごろ～20時ごろまで)	7	4.2%
朝(7時ごろ～10時ごろまで)	7	4.2%
夕方(16時ごろ～19時ごろまで)	5	3.0%
計	165	100.0%

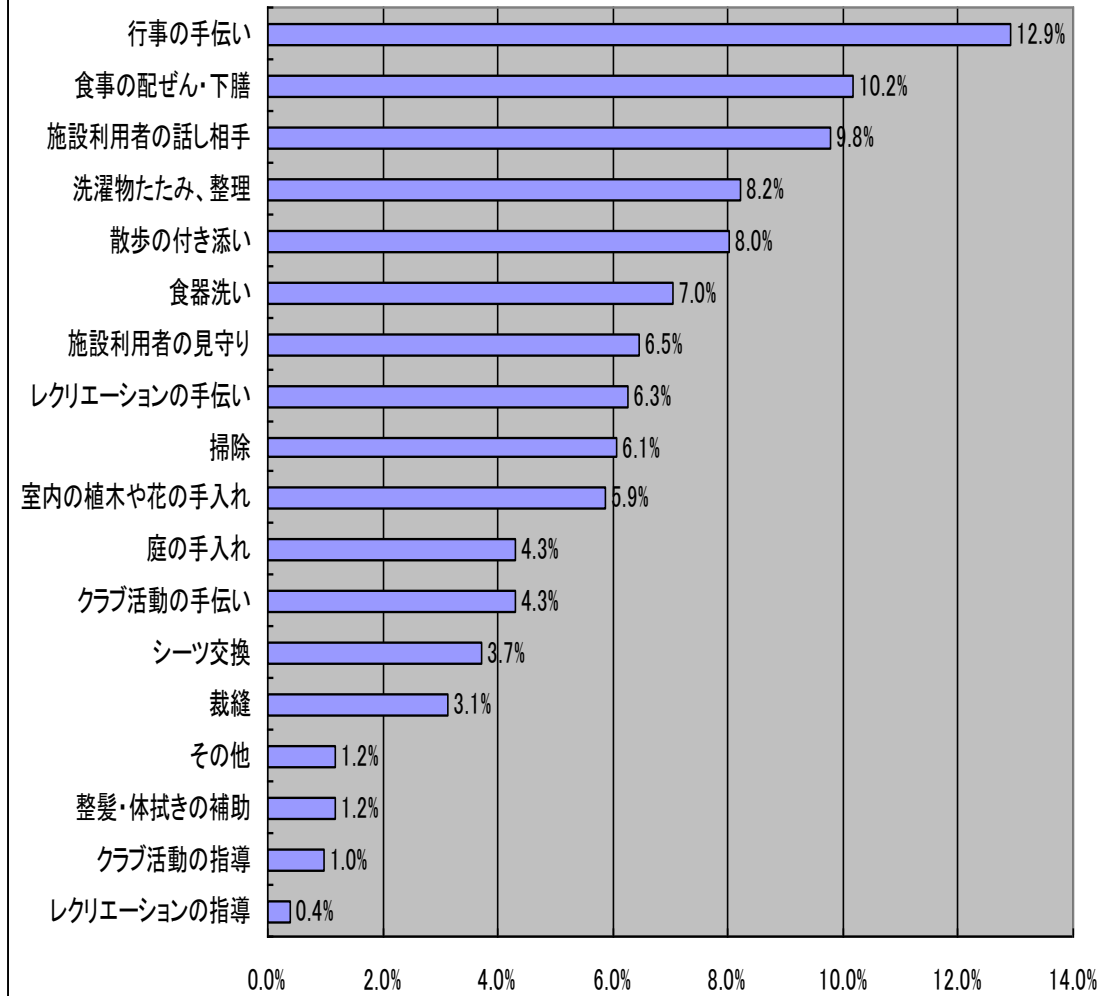


【ボランティア活動の内容】

問8 介護施設でボランティア活動をするとしたら、次のどのようなことをしてみたいと思いますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

項目	件数	構成比
行事の手伝い	66	12.9%
食事の配ぜん・下膳	52	10.2%
施設利用者の話し相手	50	9.8%
洗濯物たたみ、整理	42	8.2%
散歩の付き添い	41	8.0%
食器洗い	36	7.0%
施設利用者の見守り	33	6.5%
レクリエーションの手伝い	32	6.3%
掃除	31	6.1%
室内の植木や花の手入れ	30	5.9%
クラブ活動の手伝い	22	4.3%
庭の手入れ	22	4.3%
シーツ交換	19	3.7%
裁縫	16	3.1%
整髪・体拭きの補助	6	1.2%
その他	6	1.2%
クラブ活動の指導	5	1.0%
レクリエーションの指導	2	0.4%

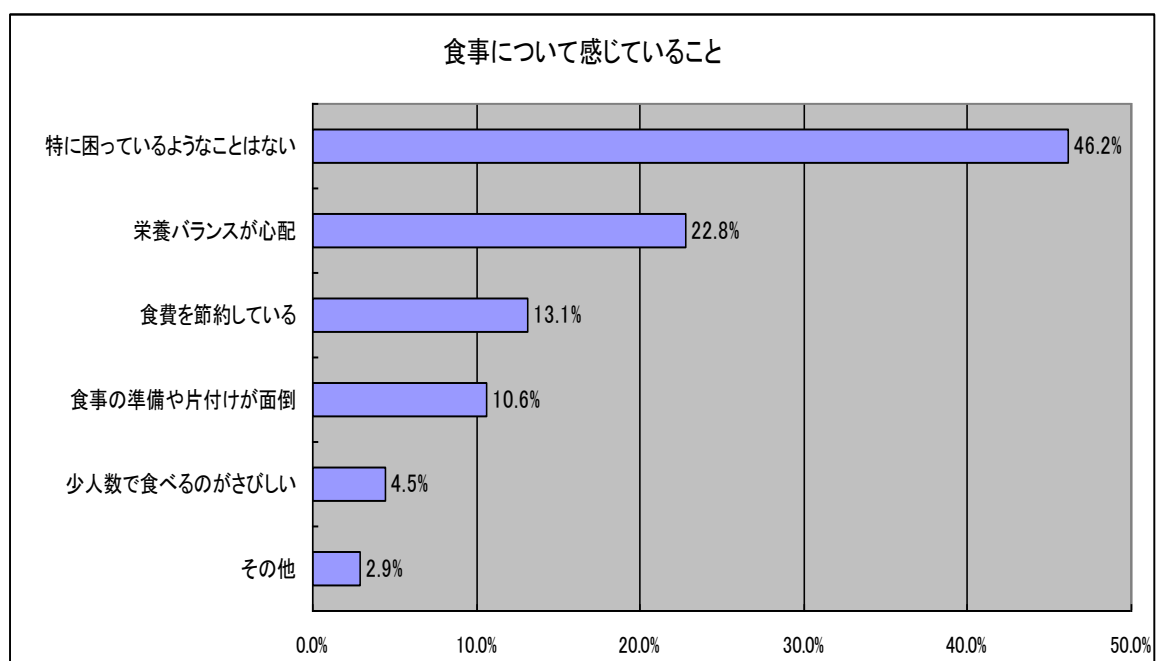
### ボランティア活動の内容



【ご自分の食事】

問9 ご自分の毎日の食事についてどのように感じていますか。あてはまるものすべてに○をつけて  
ください。

項目	件数	構成比
特に困っているようなことはない	144	46.2%
栄養バランスが心配	71	22.8%
食費を節約している	41	13.1%
食事の準備や片付けが面倒	33	10.6%
少人数で食べるのがさびしい	14	4.5%
その他	9	2.9%

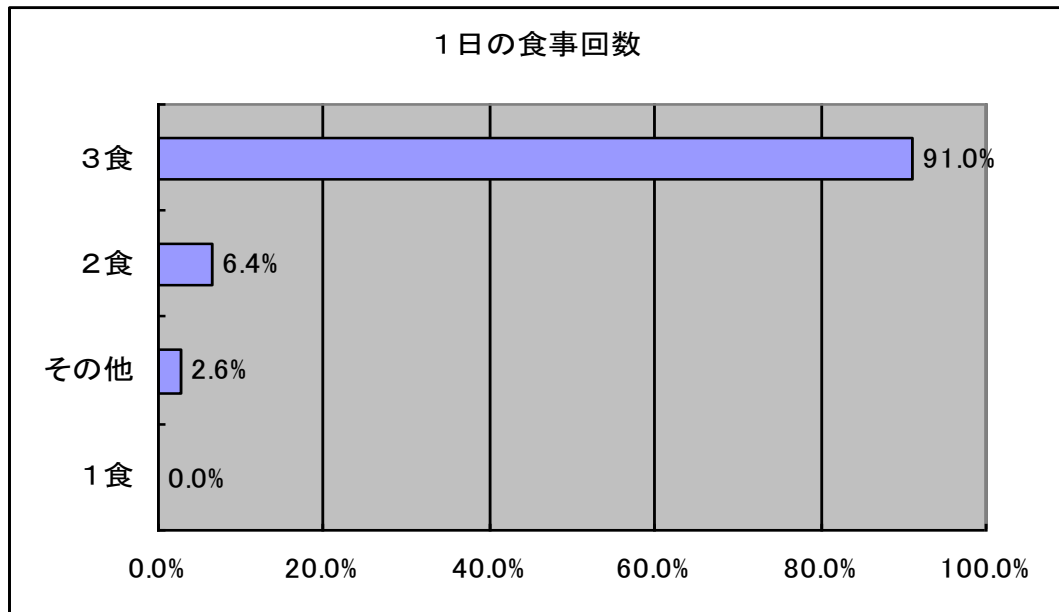




【1日の食事回数】

問10 あなたはふだん1日に何食、食事をとりますか？

項目	件数	構成比
3食	212	91.0%
2食	15	6.4%
その他	6	2.6%
1食	0	0.0%
計	233	100%

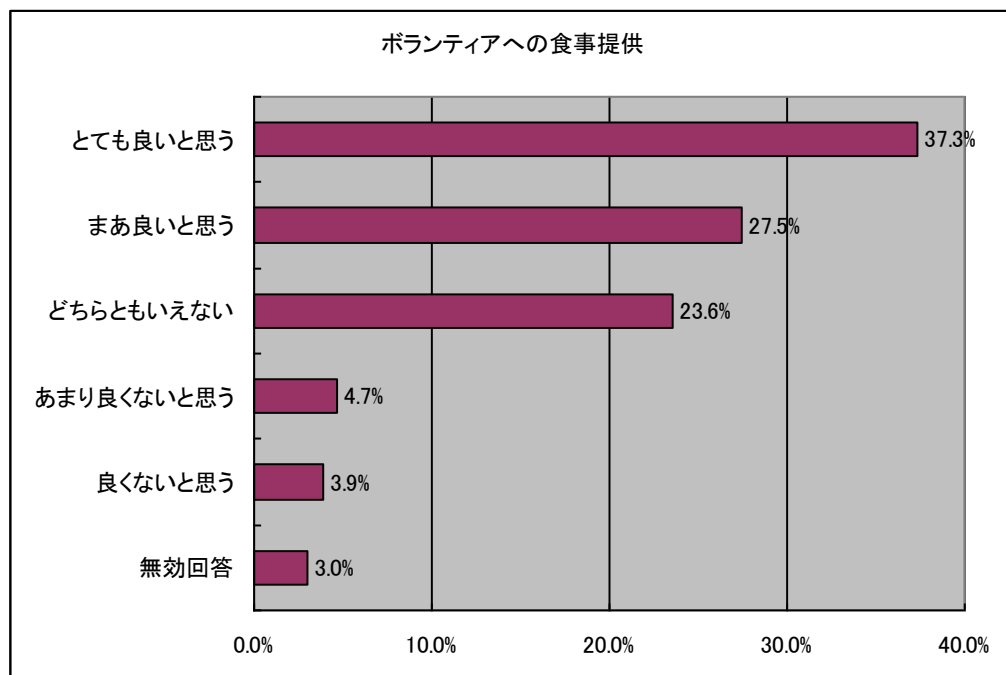


【ボランティアへの食事提供】

問1 1 65歳以上のボランティアに対してお礼を兼ねて、施設から食事を提供することについて

どう思いますか。

項目	件数	構成比
とても良いと思う	87	37.3%
まあ良いと思う	64	27.5%
どちらともいえない	55	23.6%
あまり良くないと思う	11	4.7%
良くないと思う	9	3.9%
無効回答	7	3.0%
計	233	100.0%



## 《考 察》

介護施設でのボランティアをしてみたいと考える方が 18.0%おり、すでに活動をしたことがあったり、現在している方も 17.2%いた。このようなアンケートに答えてくれる方々なので比較的関心が高いのかもしれないが、ボランティアを受け入れたいと考えている介護サービス施設にとっては心強い数字ではないだろうか。

ボランティアができる頻度については週に 1 回程度という方が最も多く 21.9%を占めた。生活機能評価の基本チェックリストでは閉じこもり予防の項目として週に 1 回以上の外出を問う項目があり、週に 1 回ボランティアによって外出する機会が作られれば、現在外出していない方にとっては閉じこもり予防に効果的と考えられる。

活動可能な時間帯としては、日中が最も多く、これは施設職員の希望する時間帯とマッチしている。2 位以下は午前中、午後とつづき、施設職員の希望が次に多い朝 7 時~10 時くらいとはマッチしていない。

希望する活動内容としては行事の手伝いが 1 位だが、職員の希望としては行事の手伝いは 10 位であった。しかし、2 位の食事の配膳・下膳、3 位の利用者の話し相手は、職員の希望もそれぞれ 3 位、1 位と高いものであった。

背景には職員には行事は施設が行うものという考え方があることが推察されるが、ボランティアが多く活動している施設では、むしろ行事はボランティアが運営の中心になっている場合もあり、ボランティアコーディネートによってはこうした考え方も変化していく可能性もある。

食事については回答者のうち 30%の人が「栄養のバランスが取れているか心配」と答えており、食費を節約している人も 17.6%いた。そのためか 65 歳以上のボランティアに食事を提供することについては「とてもよいと思う」が 37.3%、「まあよいと思う」と答えた人が 27.5%おり、両方を合わせると 64.8%もの人が施設から食事が提供されることに好意的であった。

## 4. 介護サービス施設と地域との連携のあり方に関する

### 課題と提言

#### (1) 地域に高齢者が増え、施設入居者の重度化が進む今こそ、

#### 高齢者が高齢者を支える仕組みを

特別養護老人ホームの入居者の平均要介護度は平成20年度には3.82（社会保障審議会介護保険部会（第28回）資料）になり、要介護4と5の入居者を合わせると、実に入居者の67.3%を占めている。5年前の平成15年の平均要介護度は3.63であったことを鑑みると、特別養護老人ホームにとって入居者の重度化は大きな課題となっている。入居者が重度化することは、全介助や2人介助の割合が高くなることでもあり、職員が以前より入居者の身体的なケアに時間がかかっていることが予想できる。また、重度化により外出も難しくなってきたおり、入居者の生活を豊かにするためには、これまで以上に地域に開かれた施設をつくり、外からの風を施設に積極的に運ぶ必要が出てきている。

また、介護職員の24.7パーセントは20代である（平成20年度介護労働実態調査）。平成22年に実施された医療施設・介護施設の利用者に関する横断調査によれば入居者の平均年齢が85.9歳であるから、介護職員の4人に1人は入居者の孫の世代よりも若いというイメージである。

今回の調査からは、そのような背景をもつ施設の現場において、介護職員たちは入居者の生活の幅を広げるために、入居者と比較的年齢が近い高齢者のボランティアの導入を希望していることが読み取れた。

地域住民も決して少なくない方々がボランティアに興味を持っていることがわかった。介護サービス施設でのボランティアは、自分の老いの準備のためにも勉強になると考えている住民の方や、高齢のため体は若い人のようには動かないが、入居者の話相手ならできるといった意見もみられた。ボランティアを受け入れることを通じて、施設は介護予防という形の地域貢献だけでなく、地域住民の福祉啓蒙や生きがいの創造など、より幅広い地域貢献が実現できる可能性がある。

さらに、特養ホームで暮らす人たちが、人間としての尊厳が守られるケアが受けられているのを施設職員と共に考える協働者としての役割を担えるようにしていく仕組みが求められる。

## (2) 求められる行政のバックアップ

これまでの様々な調査から、多くの特別養護老人ホームでは、すでにボランティアを受け入れていることが明らかになっている。例えば横浜市が平成21年に行ったアンケートではボランティアを受け入れている特別養護老人ホームは90.8%にのぼり、神戸市で平成19年に行われた調査でもボランティアはいないと回答した特別養護老人ホームはわずか3.0%にとどまっている。

しかし、1施設当たりのボランティア受け入れ人数となると、同じ横浜市の調査で1特養当たり19.3人、神戸市の調査で1施設当たりの登録人数が27.6人となっている。さらに神戸市の調査では1日当たりのボランティア参加人数を調査しており、1施設あたり1日3.6人となっている。つまり、特別養護老人ホームはほとんどの施設でボランティアを受け入れているものの、限定的な活動にとどまっている施設が少なくないと言えよう。

その一方、年間延べボランティア数が3400人を超えるような施設もあり、ボランティア受け入れの仕組みを改善すれば、施設にとってボランティアがさらに大きな役割を果たせる可能性も秘めていると言えよう。

ボランティアを通じた介護施設と地域との連携をより密にしていくための方策の一つとしては、やはり行政のバックアップが考えられる。

例えば横浜市では先のアンケート調査の後、平成21年10月から介護支援ボランティアポイント事業のモデル事業をスタートさせ、平成23年4月にはボランティア登録者が4468人に達した。また、ボランティアの受け入れ施設も257施設に上っている。

この事業は地域支援事業の一つとして位置付けられており、地域支援事業交付金を活用しているため、市の財政負担は総事業費の12.5%の負担で済む。

65歳以上の高齢者が研修を受け、ボランティア登録をすると、横浜市から委託を受けた管理機関から施設の紹介があり、1日2時間以上のボランティアをした場合200ポイントが付与される。年間8000ポイントを上限として1ポイント1円で換金できる。

ボランティアの募集から事前教育、ボランティアの希望と施設のニーズのマッチング等を行政がサポートしていることは、ボランティアを受け入れたいと考えている施設にとって非常に大きなサポートであろう。

また、同じく横浜市が平成22年に行った調査によれば、調査に回答した施設のうち、ボランティアポイントとは別に、ボランティアに無償、又は有償で食事を提供していた施設も少なからずある。ボランティアポイントと食事の提供を組み合わせることにより、より積極的にボランティア活動を支援することが可能になるとと思われる。

今回の調査からは、介護サービス施設と地域との連携をはかることは、施策としての優先順位はあまり高くない市町村もあることがうかがえたが、取り組み次第では横浜市のよ

うに地域のボランティア活動の活性化につながる可能性があり、今後の行政の取り組みに期待したい。

また、介護保険制度による市場原理の導入で、全国には様々なバックグラウンドを持つ施設が設立されたが、サービスの質は玉石混合と言える。施設における虐待事件も未だになくなる。そうした状況の中で、地域連携になどまだ目を向けられない施設も少なからず存在するであろう。そのような状況の中で、施設に地域の目を日常的に入れるためにも、行政には施設と地域の連携を後押ししてもらいたい。

施設が主体となって体制を構築し、地域住民で核になる人にコーディネーターを担ってもらい、施設と住民のマッチングを果たす役割を果たしてもらおう。利用者にとって、ボランティアに関わることでどのような生活ができるようになったか、また、職員にとって自分の仕事の補佐ではなく、利用者の生活の幅がどのように広がっていったか、ボランティアにとって老後の人生設計にどのように役に立ったかなどボランティアの施設での位置づけを明確するためにも、行政の補助金による支援は必要不可欠な条件と考える。

### **(3) 地域に支えられ地域を支える信頼できる強固な連携が必要**

高齢者が最期まで安心して生きられる地域包括ケア体制の構築が急務になっている中、社会福祉法人が運営する特別養護老人ホームは今まで以上の地域福祉への貢献を果たしていかなければならない。

地域ごとに様々な事情があり、介護サービス施設と地域との連携は行政がリーダーシップをとってくれるとは限らない中では、やはり介護サービス施設自らが、地域連携を積極的に図る姿勢が求められている。

今回の調査対象となった施設では、自らが地域との連携を図り、地域に貢献していこうという能動的な姿勢をもとうとしていることがわかったが、ボランティア受け入れ一つをとっても、具体的にどのようにすればよいかは模索中であった。

今回の調査や、年間何千人ものボランティアが活動する施設の事例をみると、ボランティアを活発化させ、入居者、地域、施設にとっての有効性を高めていくためには、次のような仕組みが考えられる。

## ① 専任のボランティアコーディネーターは地域住民から人材を

入居者や施設にとって本当に必要な時間に、必要な活動をしてくれないと、ボランティアはありがた迷惑になる恐れも秘めている。一方ボランティアにとっても、自分の得意なことややりたいことができずに、施設の職員の手伝いのように扱われてはやる気を失う。ボランティア活動はお金でのつながりではないだけに、お互いのニーズをマッチングさせることが非常に重要になってくる。

今回の調査でもそうした意見がいくつか見られたが、やはり施設に専任のボランティアコーディネーターを置き、きめ細かいコーディネートやボランティアの事前教育、日々の活動のフォローを行っていくことはキーポイントといえよう。

ボランティアコーディネーターを施設の職員にすることは、施設経営上ハードルが高く、コーディネーターの役割を考えると、職員よりも地域に人脈を持っている地域住民に有償ボランティアとして行ってもらう形が望ましいと考えられる。

実際、ボランティアが年間延べ何千人活動しているある施設では、地域の学校を退職した元教師にコーディネーターを依頼し、ボランティアの発掘から地域の趣味サークルとの連携までを行っている。

## ② ボランティアと受け入れ側の職員の教育体制をつくる

今回の調査では職員がボランティア受け入れの際の不安なこととして事故やけがといったリスク面と、事前教育の難しさを指摘する声が多かった。

リスクマネジメントの観点や、プライバシー保護の観点からもまずはボランティアに対する事前教育の仕組みづくりが重要となる。

一方、職員側に対してもボランティアの役割や特性を理解し、ボランティアを円滑に受け入れるための事前教育が必要である。正社員だけでなくパート職員も含む全職員への教育が必要となる。

また、入居者の状況が刻々と変わっていく施設においては、リスク回避の方策も常に変化していく。ボランティアに対しても施設のリスクマネジメントに連動した継続的な教育が求められてくる。

## ③ ボランティアが継続的・定期的な活動ができる仕組みをつくる

年に1回の感謝の会や、ボランティアに10回来たらコミュニティカフェのコーヒーチケットがもらえるなど、ボランティアに感謝を表し、モチベーションを維持できる仕組みを作る。

また、できればボランティア室を作り、荷物を置いたり、休憩したりできるようにする。そのようなスペースがあることで、ボランティア同士の人間関係が構築され、困ったときに相談できたり、ボランティアへのモチベーションがさらに高まることが期待できる。

また、ボランティアコーディネーターの席をボランティア室に置くことにより、ボランティアが困ったことを気軽に相談できたり、コーディネーターもタイミング良くボランティアをフォローできる。

## (4) まとめ

今回の調査を通じて、介護サービス施設で高齢者がボランティアを行うことについては、地域・施設双方にニーズがあると推察された。また、ボランティアを行った際に、施設の栄養バランスのとれた食事をとることも、双方からおおむね好意的に受け取られていた。

ただし、介護サービス施設でのボランティア活動と食事摂取が、はっきりとした介護予防効果をもたらすかどうかのエビデンスは今回調査していない。高齢者が介護施設でボランティアを行うことは、すでに一次予防対象者施策としては認められているが、基本チェックリストにあるように、ボランティアの頻度が週 1 回以上であれば、少なくとも閉じこもり予防の効果があることは予想できる。また、栄養改善についても現在行われている介護予防の教室事業と併せて、施設でボランティア活動を行い、食事をしてもらうことは効果的なのではないだろうか。

現在行われている教室事業を中心とした二次予防対象者施策は、対象となる高齢者に対して財源を使う施策であることはまちがいない。介護支援ボランティアも介護予防効果については未知数である。同じ財源を使うのであれば、その効果をより大きなものにしていく努力が一層求められている中で、今後はボランティア導入のモデル事業等を行い、介護予防効果についても検証していく必要があると考えられる。

一般的には、年を重ねるにつれ社会とのつながりが希薄になってくるが、人のために役立ちたい、社会とつながっていたいと考える高齢者は多い。その高齢者の「力」を介護の分野で活かすことができれば、ボランティア本人にとってもプラスであるし、受け入れる施設にとっても介護に厚みが増すことからプラスとなる。食事の提供やポイントの付与といった取り組みが継続的なボランティア活動の支援になればよいのではなかろうか。

ボランティアを導入する施設の目的と地域住民の目的や方向性が合っていることが最も重要である。単なるそれぞれのメリットではなく、関わることで利用者の尊厳を守ることにつながっていることを意識できる機会が作ることによって、自分の人生が豊かで安心できるものになっていけるように明確なビジョンが必要であろう。



# 資 料 編

職員アンケート  
調査票・自由記述

住民アンケート  
調査票・自由記述

※自由記述は調査直接関係する意見のみを掲載しています。

## 職員アンケート調査票

\*あてはまる番号に○をつけてください。

1. あなたの職種は何ですか。
  - 1) 一般介護職員
  - 2) 看護師
  - 3) ケアマネジャーまたは生活相談員
  - 4) 事務職員
  - 5) リーダー職（ユニットリーダー、フロアリーダー以上の役職、看護リーダーなど）
  - 6) その他
  
2. あなたが働いているのはどの事業所ですか。
  - 1) 特別養護老人ホーム
  - 2) 養護老人ホーム
  - 3) デイサービス
  - 4) ショートステイ
  
3. あなたの勤務形態を教えてください。
  - 1) 正職員
  - 2) 非常勤職員
  
4. あなたは 65 歳以上の方のボランティアの受け入れについてどう思いますか。
  - 1) 受け入れたい
  - 2) どちらともいえない
  - 3) 受け入れは難しい
  
5. あなたは 65 歳以上のボランティアにどのようなことをしてもらいたいですか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
  - 1) 施設利用者の見守り
  - 2) 食事の配ぜん・下膳の手伝い
  - 3) 食器洗い
  - 4) 洗濯たたみ、整理
  - 5) シーツ交換
  - 6) 整髪・体拭きの補助
  - 7) 掃除
  - 8) 裁縫
  - 9) 施設利用者の話し相手
  - 10) 散歩の付き添い
  - 11) クラブ活動の指導（具体的に： \_\_\_\_\_）
  - 12) クラブ活動の手伝い
  - 13) レクリエーションの指導（具体的に： \_\_\_\_\_）
  - 14) レクリエーションの手伝い
  - 15) 行事の手伝い
  - 16) 庭の手入れ
  - 17) 室内の植木や花の手入れ
  - 18) その他（具体的に： \_\_\_\_\_）

→裏面に続きます



職員アンケート 問9 自由記述

65歳以上なので年齢において健康面など気になりますが、本人次第だと考えます。体調には特に気をつけていただきたいですね。

65才以上のボランティアさんが来ていただけることはご利用者が同世代のほうが一緒に話相手など、若いワーカーが理解が難しい世代間のギャップを少しでも埋め合わせるという意味では大変いい事だと思います。ボランティアさんが来ていただける無理のない時間、活動内容を用意することが大切に思います。地域の支援として65才以上の方が特別養護老人ホームを身近に感じていただけることにも意義が大きいと思います。受け入れる側の事前教育など準備も大切です。

8の回答の理由として、昼食や夕食をご利用者と一緒に食べてもらえるなら提供してもいいと思う。

ある程度の年齢制限はいると思う。ボランティアなのか、介護をされに？ヒマつぶしに来られているのか分からない人がいる。

色々問題はありますが若い介護職員にはない経験や知識を出していただけたらと思います。

お元気な方が友達感覚でお話し相手になっていただけるとご利用者様も元気になって生きる希望が持てると思います。

お互いにとって利のあることだと思う。お互いの歩み寄りを続け、いい形で実現すればと思う。

介護の経験の有り無しで活動内容は少し変わってくると思いますが、どちらにしても利用者様の立場で考えてくれる方、性格の良い方に来ていただきたいです。

金銭を受け取らないでお手伝いして下さることにしましてはすごくいいことだが問題があった時に退所が難しくなりそう。

志の高い方に是非来ていただきたい。又はご利用者との年齢差が近いとご利用者もまた安心されるのでは…

個人情報の取り扱いについては十分気をつける必要があると思う。ボランティアコーディネーターの必要性を感じます。(人数が多くなると片手間には出来ない)

ご利用者の世代に近い、もしくは子供に近い世代なのでご利用者の気持ちや環境が分かると思います。私も学べるものがたくさんあると思います。

最近、どうしても現場は若い人が多いので、気遣いや昔から大切にされてきた事がおろそかになってしまっているのではないかと思う。生活の知恵や四季の催しなど色々教わりたい。この世代の方の楽しみを知りたい。たくさん話を聞かせていただいたり、関わる中で自分の引き出しを増やしたいです。

雑用係としてでなく、ご利用者の隣人としてお迎えしたい。

<p>仕事内容の線引きをどこからどこまでといった内容を明確にするだけでなく、本当に同和園で地域との連携したいことの具体的内容が各スタッフ、ボランティア、受け入れ担当部署、相談員等がしっかり共有すべきと思う。アバウトな引き受け方は良くないと思います。</p>
<p>事故やトラブルを減らす為にもボランティアさんへの事前教育をしっかりとやる必要があると思います。</p>
<p>しっかり仕事をしていただける方が良いです。お年寄りとお話をしていただけると良いです</p>
<p>施設には 65 才未満のご利用者もおられ、ボランティアの方よりも年下というケースや年齢の近い利用者に対してどういう接し方をされるのか気になる。「同世代」であるために言葉使いや態度がどういう風になるのか、良く出るのか、悪く出てしまうのか…想像できない。依存の強い方に対して厳しい口調で注意されるのではないか、きつい口調で暴力をふるわれる方に対して、同じような言動で返してしまわれたりしないか…色々心配です。</p>
<p>社会全体のために良いと思います。</p>
<p>人生の先輩、生活の仕方や工夫を知っておられ、ご利用者との接し方も上手にされる年代だと認識しております。私も勉強させてもらいたいです。</p>
<p>人生の先輩として職員に対しても何か思うところがあれば話を伺いたい。</p>
<p>身体介護は双方に負担が生じてしまうと思います。生活援助中心で、主に日中、助けていただけると幸いです。</p>
<p>積極的に受け入れていきたい。100 才のボランティアの方などいたら面白いでしょうし、話にも説得力があると思います。</p>
<p>是非に来ていただきたいと思います。</p>
<p>双方にとって良いなら受け入れ OK。ウエルカムします。</p>
<p>地域でしたい人はいると思う。受け入れ体制をしっかりとっておけば地域と密着出来ていると思う。</p>
<p>地域の人との関わりが多いほど、地域にご利用者、スタッフも出やすくなるかなと思います。</p>
<p>地域ボランティアが活発になる支援なども取り込んでほしい。</p>
<p>長期的に続けてもらえる仕組みが必要だと思う。ボランティアといわず、小額でも支払をしてボランティアの人の生活もたてていかないといけないと思う。ただで時間をさいてもらうには 65 才~のパワーはもったいない。</p>
<p>出来れば来て頂きたいけれど体力的に、あとボランティアということなのでどこまでしてもらったらいいいのか分からないので、受け入れるなら可能、不可能を決めてほしい。</p>
<p>同年代に近い人達と散歩、又は話し相手になる事で利用者の方はとても楽しいのではな</p>

<p>いか。昔を思い出し、とても良いと思います。</p>
<p>日常会話、日常生活など、家で生活されていた頃は普通にされていた事を、一緒に（利用者として）するには期待してしまいます。</p>
<p>パソコンなど機械操作について</p>
<p>ボランティア活動を通して福祉の理解、生きがい（やりがい）に繋がっていただけたらいいな、と思います。</p>
<p>ボランティアさんと利用者さんが一緒に過ごす事でご利用者さんがいい時間を過ごされるなら受け入れはありがたいと思います。</p>
<p>ボランティアとご利用者の関係について親密になりすぎないか心配です。物品の受け渡しや金品の受け渡しなど。</p>
<p>ボランティアの受け入れはとてもよいと思います。ボランティアの事前教育も大切ですが職員側のボランティアさんにどこまでお願いするのかなど、情報、状況共有をしっかりとすることも大切だと思います。</p>
<p>ボランティアの方が自分の立場を理解されていないとストレスになると思う。（「あれしたらダメ、これしたらダメ」から指示されることなので）</p>
<p>ボランティアの方にどのくらいの量の仕事を任せても良いのか、パートさんと同じくらいでもかまわないのか、遠慮などの問題があると思う。</p>
<p>ボランティアの窓口職員の固定が必要だと思う。来てもらってほったらかしにならないようにする必要がある。</p>
<p>ボランティアをしたいと思う気持ちだけでありがたいことだと思う。ご利用者が一番だということに変わりはないがボランティアの人にも楽しさや悩みを共感してもらい、ボランティアの人のやりがいにもなっていただければと思う。</p>
<p>難しい事が多いかもしれませんが、利用者の方は勿論、職員にとってもニーズがあると思います。学ぶことが多いのではと思います。職員だけでは支えられないことをボランティアの方に助けていただき、それがボランティアさんにとっても良い事につながるのであればとてもすばらしい事と思っています。</p>
<p>やる気のない人はいない。本当にやりたい人だけ来てほしい。でないと気を使うし、余計に大変になる。（本音）</p>
<p>若い職員が多いので勉強になると思います。ご利用者にとっても色々な年代の方がいた方がいいと思います。</p>
<p>若い職員が学ぶべき点も多いと思うからいいと思う。ただ人によっては利己心や利用者様に対して軽薄な接し方になる方もいるので、職員とボランティアさんがお互いにいい関係でいられるように、指導、定期的な面談などが必要だと思う。</p>
<p>若い人だけの介護提供側の人員は多いところだが、お年を召した方がもっと上のお年寄りと接する場は必要だと思う。何が得られ、どんな反応が返ってくるかわからないが…</p>

私たち若い職員では分からない昔の話などして下さったらご利用者の新たな一面や知らなかった好みなども発見できそうだな、と思います。

介護施設と地域住民が高齢者を支える流れの必要性はとても同意します。ぜひやるべき。施設もいろいろな風を入れるべき。

住民アンケート調査票

## 介護施設でのボランティアに関するアンケート調査票

\*あてはまるものに○をつけてください。

1. あなたの年代（年齢）を教えてください。  
a. 39歳以下      b. 40歳～64歳      c. 65歳～69歳  
d. 70歳～74歳      e. 75歳～79歳      f. 80歳以上
  
2. あなたの性別を教えてください。  
a. 男      b. 女
  
3. あなたの世帯の人数を教えてください。  
(※同居している方のみ。回答者本人を含む人数でお答えください)  
a. 1人      b. 2人      c. 3人      d. 4人      e. 5人以上
  
4. あなたはこれまで、老人ホームなどの介護施設でボランティア活動をしたことがありますか。  
a. 過去にしたことがある（具体的な内容：      ) )  
b. 現在している（具体的な内容：      ) )  
c. したことがない
  
5. あなたは老人ホームなどの介護施設でボランティア活動をしてみたいと思いますか。  
a. してみたい      b. どちらとも言えない      c. わからない

**※問6～8は、問5で「a. してみたい」、「b. どちらとも言えない」と答えた方のみお答えください。**

6. あなたが介護施設でボランティア活動をするとしたら、できる頻度はどれくらいですか。  
どれか一つに○をしてください。  
a. ほぼ毎日でもできる      b. 2～3日に1回程度      c. 週に1回程度  
d. 2週間に1回程度      e. 1か月に1回程度      f. 行事の時ぐらい
  
7. あなたが介護施設でボランティア活動をするとしたら、できる時間帯は次のどれですか。  
あてはまるものすべてに○をつけてください。  
a. 朝（7時ごろ～10時ごろまで）  
b. 午前中（9時ごろ～12時ごろまで）  
c. 日中（10時ごろ～15時ごろまで）  
d. 午後（13時ごろ～17時ごろまで）  
e. 夕方（16時ごろ～19時ごろまで）  
f. 夜（17時ごろ～20時ごろまで）

⇒裏面に続きます



8. 介護施設でボランティア活動をするとしたら、次のどのようなことをしてみたいと思いますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- a. 施設利用者の見守り
- b. 食事の配ぜん・食器を下げる手伝い
- c. 食器洗い
- d. 洗濯物たたみ、整理
- e. シーツ交換
- f. 整髪・体拭きの補助
- g. 掃除
- h. 裁縫
- i. 施設利用者の話し相手
- j. 散歩の付き添い
- k. クラブ活動（書道・音楽等）の指導（具体的に： \_\_\_\_\_）
- l. クラブ活動（書道・音楽等）の手伝い
- m. レクリエーション（朗読・ゲーム等）の指導（具体的に： \_\_\_\_\_）
- n. レクリエーション（朗読・ゲーム等）の手伝い
- o. 行事の手伝い
- p. 庭の手入れ
- q. 室内の植木や花の手入れ
- r. その他（具体的に： \_\_\_\_\_）

**※問9～11は、全員お答えください。**

9. ご自分の毎日の食事についてどのように感じていますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- a. 栄養のバランスがとれているか心配
- b. 毎日の食事の準備や片付けが面倒で大変
- c. 少人数で食べるのがさびしい
- d. 食費を節約している
- e. 特に困っているようなことはない
- f. その他（具体的に： \_\_\_\_\_）

10. あなたはふだん1日に何食、食事をとりますか？

- a. 1食
- b. 2食
- c. 3食
- d. その他（具体的に： \_\_\_\_\_）

11. 介護施設でボランティア活動をする、食事が無料で提供されることについて、どのように思いますか？（介護施設では、栄養士が献立を作成して、栄養バランスのよい食事を提供しています。） ※現在は一般的に無料での食事提供は

していません。

- a. とても良いと思う
- b. まあ良いと思う
- c. どちらとも言えない
- d. あまり良くないと思う
- e. 良くないと思う

12. 介護施設でのボランティアやご自分の健康維持について意見などがありましたら、ご自由にお書きください。

( \_\_\_\_\_ )

ご協力ありがとうございました。この用紙だけを返信用の封筒に入れ、郵送してください。

## 記述回答集計

問 4 - a 「過去にしたことがある」 具体的な内容	
1.	お祭の付き添い。
2.	行事での手伝い。
3.	年に1度。
4.	デイケアで入浴前後の介助、食事の配膳、話相手、ゲームなどに参加。
5.	配食サービス（配達）。
6.	シーツ交換。
7.	シーツ交換、行事参加。
8.	行事の手伝い。
9.	カラオケ。
10.	お茶摘み。
11.	同和園でナースとして15年間常勤。
12.	入浴後の世話、配膳サービス。
13.	食事手伝い。
14.	シーツ交換、レクリエーション等（楽器を使って）。
15.	老人ホームではなく共同作業所給食ボランティア。
16.	レクリエーション等の車椅子介助。
17.	見守り介助。
18.	餅つき、パーティ。
19.	コーラスとゲーム、ボーイスカウト活動の一環として。
20.	月1回、グループでプログラム。
21.	見守り介助
22.	餅つき、パーティ
23.	月1回、グループでプログラム
24.	コーラスとゲーム、ボーイスカウト活動の一環として

問 4 - b 「現在している」 具体的な内容	
1.	毎年、多額の寄付をしている。
2.	シーツ交換。
3.	b と c の違いが明確でないように思いますが…
4.	体操、レクレーション等（京都市健康づくり協会）。

5.	音楽活動、傾聴。
6.	イベントの手伝い、掃除。
7.	学区内福祉協議会の運動。
8.	月1回位、音楽関係で訪問しています（ハーモニカ4人グループ）。
9.	歌ったり舞う、芸者になり踊る。
10.	学区社協の副会長として活動。
11.	シーツ交換。
12.	障害者施設の調理ボランティア（昼食）。老人ホームのシーツ替えボランティア。
13.	清掃、特に窓、敬老の日の行事参加の手伝い。
14.	年1回病院でミニコンサート

#### 問8-k 具体的な内容

1.	アロマセラピー。
2.	陶芸。
3.	歌唱指導

#### 問8-m 具体的な内容

1.	コーラス10年、イタリア歌曲、カンツォーネ8年、現在も続けています。発表会は年2度、イタリア美術史受講中7年。
----	---

#### 問8-r 具体的な内容

1.	健康体操の指導（リラックス体操、ストレッチ）。
2.	車の運転。
3.	大工さんの補助的な事。
4.	基本的には「独立自尊、和して同ぜず、孤立を恐れず」福沢諭吉さんの言葉を可能な限り守りたいと願っています。
5.	手芸、折り紙

問 9-f 具体的な内容	
1.	殆ど食べていない。
2.	添加物に気を付けている。
3.	近くに娘がいるのでいつも気にしてくれる。私も 70 才過ぎましたので？
4.	主人が亡くなってから、つい品数が少なくなる。
5.	料理が出来ないので困っている。
6.	肉類よりも魚類をとるようにしたい。
7.	栄養のバランスはとれています。
8.	ひとりでも食事を作る楽しさを失いたくない。後何回おいしい食事出来るだろうかと考えますと、おろそかにできません。
9.	食べれる物が限られる。
10.	出来るだけ色々な食材を食べるようにしているが、料理法を替えてはいるが同じ食材を 1 週間位、食べている事になり、どうかなと思っている。

問 10-d 具体的な内容	
1.	ある時のみ食べる。
2.	腹が減ったら食べる。
3.	忙しい時は朝ご飯を抜く。
4.	3 食以外に 3 時には食べたり、たまに食べない時もありますが、家にいるとほとんど食べるかも。
5.	3 時、茶、お菓子、クッキー、アイスクリーム。

問 11 具体的な内容	
1.	「まあ良いと思う」が？
2.	ボランティアである以上、無償であるべきだと考えます。
3.	実際にその話が持ち上がらないとわかりません。変化の多い毎日なので。
4.	ボランティア参加した時は食事は持って行くのが当たり前。ただ、水かお茶があるとありがたい。
5.	食事で釣るな。金を出せ。

問 1 2	
1.	たまに行くボランティアで栄養のある食事をしてもらっても仕方ないと思う。それよりも将来が安心できるようなシステムや介護施設作りに努めてほしい。
2.	介護する家族の負担はどうしたら減るのでしょうか…
3.	単に体を動かすより運動をする事と心掛けております。
4.	無理のないシフトでのボランティアがしたい。する方も受ける方も楽しいのが理想。
5.	運動不足にならないように気をつけています。
6.	人を当てにせず自分の事は自分でする事。ボランティア等の嘘のかたまり、金がほしいのが本音。
7.	毎日1時間の散歩をしています。
8.	施設により様々だと思うが献立内容、味付け、食器など工夫されているところが良いと思う。
9.	元気な高齢者も増えている世の中で、ボランティアというとまだまだ敷居が高いので、介護施設の方からもっと地域の高齢者との距離感を埋めるような活動をしてはどうかと思います。
10.	自分の趣味や特技を活かしお役に立てることがあればよいと思う。
11.	まだまだ子供が小さく親の介護もあるのでボランティアは無理ですが、金銭的（パートなどに行かなくて良い…）、体力的、心にも余裕がある人は介護施設のボランティアは必ず良い人生経験になると思うのでどんどん協力されたいと思います。介護のボランティアという専門的な知識や資格が要るのかと思っていたが、問9に眼を通すと色々な事で協力できるという事が分かりました。私の様に思われている方も多いと思うので、色々な種類の協力出来る事がある事をもっと広めていったらいいと思います。
12.	介護施設で働く人達の手当てをもっと上げるべきだと思う。介護施設にいつお世話になるかという不安がある一人暮らしの私はもっと充実してもいいと思います。親の面倒をみない子供が増えている今、働く人が増えるように大事にしてあげてほしいです。そのかわりルールをきびしくしてほしい。
13.	今はまだ不自由がないので何ともいえません。介護施設で暮らす方が施設内ばかりで暮らすのではなく、そこそこ健康なら外界と関わりながら暮らされる事が大切なのではないかと思います。
14.	我が家も夫婦2人なのでこれからの生活に不安を感じる。私はあまり体調が良くないのでボランティアされる方には頭が下がります。
15.	子供が結婚して夫婦での生活となり多少ゆとりが出来たのでお手伝いできる事をしたいと考えています。

16.	自分の健康増進のために適度の身体を動かし、人と人とのつながりを大切にしています。
17.	介護施設でのボランティアについては私達の年齢になると全てがよい勉強になると思います。
18.	今は考えられないが前向きに自分の人生をすすんでいきたい。
19.	「いきいき筋トレ」ボランティアを行っています。施設でボランティアし食事が無料で提供とのことですが、入所している皆さんの食費が高くなるのではと気になります。
20.	地域のサークル等のお付き合いは苦手ですがお世話するのなら大いに歓迎です。息子を仕事に送り出したら私一人なので話し相手がいません。かと言って友達と遊びに行く費用もなく、家で閉じこもりがちです。
21.	今はまだ元気だがいつ介護される側になるかわからないので元気うちにボランティアできたらいいと思います。
22.	健康管理に万全を期しているが…将来、介護が必要となった時のことも考え、ボランティア活動が出来る今、自分で出来る事を考えたい！！
23.	アンケートのボランティア活動に関して興味はあります。少しでもお役に立てればと思っています。しかし今は妻が寝たきりの一歩手前の状態で、その介護、家事全般等で手一杯です。
24.	個人の希望プランがどこまで施設で実現できるかがカギ。
25.	施設入所者の心に寄り添うということを大切にしたいと考えています。押しつけにならないように気をつけたいものです。
26.	ボランティアで参加しても施設の方が親切にしてくださっています。
27.	現在、介護施設に勤務しているので、ボランティアが来てくださる方がいるととてもありがたく思いますが、自分がボランティアに行くことを考えると、片親のため、子育てしながらの生活で時間・体力ともありません。健康維持には気をつけていますが、疲労の回復が遅いため休みの日は、体を休めることを中心に考えて生活しています。
28.	自分に運動も兼ねたボランティアが良い。
29.	以前はボランティアしたいと思っていましたが腰が悪くなってから自信がなく、今では考えなくなってしまいました。
30.	自分の健康だけでなく家族が元気で過ごせるように食事には気を使っていると思います。
31.	最近、関節痛なので早く良くなるようストレッチ運動をしている。
32.	ついこの間、祖母を看取り、目下、体調を崩し、介護などのボランティアについては考えられない。
33.	少しでも人の役に立てればうれしい。

34.	夫もなくなり一人暮らし。子供達は結婚し別居。今風にあまりかまわず健康に、自分の事は自分でを心掛けている。近頃、白内障気味である。歩く事、人と接する事(話す)にこだわっているが…
35.	ボランティアは生半可な気持ちでやるべきではないので、手伝いくらいからはじめたいが、そのような施設は少ないと思います。
36.	午前中は3時間、週5回はたらいっているため、ボランティアも出来たら月1回位でいいと思いますが、毎日体を動かしているので年はいっていますが健康維持できていると思い、散歩も1回はしています。
37.	要介護5の主人を家族が協力して家でみています。介護施設やボランティアより家族間の問題でしょうね。
38.	自分の健康維持のため、週3回グラウンドゴルフに行っています。
39.	介護されるようなことにならないように脳梗塞、認知症を予防する生き方を学び、年齢相応に無理はせず、頭と体を使い、スイーツブームやマスコミ情報に惑わされず、和食を中心に腹八分。早起き、早寝、ストレッチ体操を実践し、趣味を楽しんでいます。物の考え方は偏らない、こだわらない、とらわれない。嫌なことも何とかなるさと笑っていればいつの間にか忘れます。
40.	年齢的にも規則正しい生活が第一です。
41.	お手伝いの対価(食事提供)ではボランティアではない。精神的に問題がある。
42.	学生や生徒等にボランティアの体験をさせてはどうか。
43.	児童見守り隊をしています。
44.	父90歳、母95歳までいろいろ介護してきて、また主人が80歳で亡くなり、今は1人になって不安です。子供は独立して他県にいます。
45.	自分の体は常に気をつけている。また近くに娘がいるので(私も70才を過ぎたので娘に頼っています)いつも気を使ってくれている。(自分が70才を越えているので娘が絶えず来てくれる。孫も来てくれる)
46.	退職後は地域でグラウンドゴルフを楽しんだり、子供に関わるボランティアをして認知症の防止をしています。
47.	介護のお世話が大変だと思います。私もいつお世話になる事が分かりませんが、介護されている皆さんもお体に気をつけてくださいね。
48.	現在習っている詩舞(詩吟で舞う)や前に習っていた民謡など、また女2人で踊る(1人は男、1人は女になり着物や衣装をつけて)、家にいるだけではボケてしまうのでお年寄りの方が喜んで下さるのがうれしくて、少々無理をしてでも月2回位出席しています。
49.	ボケ防止に週2回お稽古に通っています。宿題や覚えることがあるから忙しく過ごしています。

50.	自由生活に喜びを感じている毎日です。スポーツ、文系クラブに所属して、その中で皆さんのお役に立つ間接的なボランティアを志しています。
51.	口は肥すな、目は肥せ。信念。
52.	ボランティア活動を知らない方が多いと思います。もっと呼びかけをしてほしいです。皆さん、お世話になる事のみ心配しておられます。
53.	少々腰が曲がっているので将来が心配です。
54.	75 才も過ぎるととてもボランティアの気になれない。
55.	良く噛むことです。
56.	健康維持のため週 2 回、グラウンドゴルフの練習をしている。
57.	私の 97 才の実母が今施設にお世話になっております。93 才～95 才まで母と妻(75 才) と同居しました。介護の大変さは十分認識しております。70 才を超えての介護は一般的には困難と思います。
58.	インドネシア語の講師ならできますが(現在もやっている)他の事はできません。それでよければやってみたいですがいかがでしょうか？
59.	私自身誕生日が来たら 78 才になります。お手伝いするよりしていただく方になるとは思いますが、でも健康に気を付けてボランティアする方になりたいと思います。夫と 2 人で食事や健康維持についていろいろ努力しています。
60.	健康維持のためにしていることもあり結構忙しく、上記のボランティアを考える心のゆとりがありません。
61.	①規則正しい生活②食事時間③過労にならないよう④腹八分目を心掛けています。
62.	同和園に 15 年間、寮母として働かせて頂き、定年後、福祉協会のヘルパーをしましたが、現在、要介護 5 の女性の方のお世話をさせて頂いています。それが終われば同和園も近くでボランティアできるかと思いますが。私も年ですが健康に恵まれ、自分の健康のためにも楽しみもあり、お世話の方もできて感謝している毎日を過ごさせて頂いています。
63.	現在 75 才、不自由なく独り暮らしをしておりますが、施設でのお手伝いができるかと問われれば疑問です。これからも迷惑をかける事なく過ごせるよう頑張ります。
64.	膝の手術のため杖を使用。ボランティアもできません。
65.	自分の通らせていただく道を少しでも勉強して行いたい。
66.	気持はやってみたいと思いますが体に自信がありません。
67.	コーラス、イタリア歌曲独唱など音楽活動は身心共に癒されます。歌詞を心して読むことの大切さ、発音で自身の健康状態を知ることができます。
68.	私は 81 才ですが野菜を作っていますから草取りくらいはできます。



69.	特別養護老人ホーム及び安く入所できるホームの数が少ないのが心配です。
70.	子供がないので老後は心配である。地域でできることをもっと考えてほしい。
71.	私自身、体が不自由になる以前はスポーツ関係ではボランティア活動を行っていましたので、今は何も出来なくて残念です。
72.	いずれ家族、施設等でお世話になると思うので、元気なあいだはお手伝いしたいと思います。
73.	ホームヘルパーを6年間した経験で、話相手を希望される方がとても多いことを知り、「大切なケア」に当たると勉強になりました。現在、近所の方の安否確認のため、訪問ボランティアを数軒しております。
74.	ボランティアといっても協力している人に何かしてあげる方がいいと思う。いらぬ人には無理にすることはないか…
75.	家で主人の父と母の介護をしたので施設でボランティア活動をする気持ちの余裕がありません。
76.	今は自分の仕事に他のボランティア活動で手一杯です。仕事を辞めた時に考えたいと思います。
77.	毎日、AM6:00~20分間、散歩をしてから通勤しています。
78.	自分の事を自分で出来る限り、他人に迷惑をかけないように心がける。
79.	足腰の筋肉を少ない時間でもきたえる運動をする。
80.	欠席しても迷惑のかからない気楽なボランティアなら健康な限り生き甲斐として人様のお役に立ちたい。この世に生を受けたご恩返しに。わずかですが…
81.	自分で出来る事をできるだけ自分ですること。時間がかかり、失敗することもあります。それも学習と思っています。
82.	職員の皆様を雑用ではなく、直接介護の必要な方々にかかわっていける時間を増やすことができればと思うのですが、私の義母も食事に1時間かかりました。食べ終わるまでついていて下さってとても感謝し、申し訳なく思いました。
83.	病気にならないように注意している。
84.	今、乳がんの治療をしながら昼間はパートに行っています。乳がんの方のいろいろな話し相手になれば……。コーラスも18年ほどしていますし、その方面で手伝いができればうれしい。
85.	毎日適度の運動や労働をすることで体力維持を心がけています。
86.	問11のボランティア活動をする人への食費は、何でまかなわれているのですか？
87.	カロリー制限をしています。アレルギーで食べないものがあります。

**介護サービス施設等の地域との連携のあり方に関する  
調査研究事業報告書**

**平成 23 年 3 月**

**特定非営利活動法人 Uビジョン研究所**

**〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1-3-18ピラ・モデルナA-405**

**TEL: 03-6904-4611 FAX: 03-3407-6055**

**ホームページ <http://www.u-vision.org> E-mail: [u-vision@diary.ocn.ne.jp](mailto:u-vision@diary.ocn.ne.jp)**